

八雲紫会議

王者スライム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幻想郷で最も恐れられている八雲紫……そんな存在になってしまった彼女は弱音を吐くわけにはいかなかった。しかし、どうしても弱音を吐きたくなる時はくる。そんな時、彼女はそこへ行くのだ……

この物語は十一人の八雲紫が話し合う簡単なものです。似たような設定の小説があるらしいですが作者は知らないのでセーフ（ギリギリアウト）

話し合うだけではなくそれぞれの八雲紫の居る幻想郷についても一話ずつ使って書くと思います。

目次

八雲紫会議

八雲紫会議	その1	1
八雲紫会議	その2	8
八雲紫会議	その3	15
八雲紫会議	その4	22
八雲紫会議	その5	30
八雲紫会議	その6	37
八雲紫会議	その7	44
八雲紫会議	その8	50
八雲紫会議	その9	56
それぞれの幻想郷		
第二の幻想郷		61
第九の幻想郷		67
第七の幻想郷		73

## 八雲紫会議

### 八雲紫会議 その1

賢者というものは大変だ。何しろ幻想郷の運営をする一部なのだから。そして、ほとんどの者が憧れる場所だから。どこの誰かに狙われているのが分からないのだからいつでも気が抜けない。だから、誤魔化す。

本当は大したことなんか無いことがバレないように、本当は大したことなんか考えていない事がバレないように。私は幻想郷を創った……だがそれは全然大したことなんかではなくてやろうと思えば誰でも出来たんだと思う。

今では、幻想郷は立派なものだが昔はそうではなかった。私が原石をある人物に作ってくれるように頼み、それを私が磨いただけ。最初なんて全然誰も知らない辺境の地だったのだ。

ああ、胃が痛む。私はただの賢者の一人だというのに何故、私に運営のほとんどを任せるのか……ああ、吐きたい。弱味を、文句を、後実際に……そう言えば今日は週末か。じゃあ、あれがある。

私は誰にもバレないようにスキマを開きそこへ入って行った。

「……これで全員揃ったわね」

「第七紫、ちよつと遅かったんじゃないかしら？」

「いいでしょう？こちらの幻想郷でもいろいろあるんだから。それは皆さんも一緒にしよう？」

そういい、席に座る。なんか知らないがここには爽快感がある。やはり、自分も含めて八雲紫が十一人も居ればなんとなくそう思えるかもしれない。

「その通りね。いちいち、遅れた遅れてないなんて争いをする必要は

無いもの」

「じゃあ、八雲紫会議を始めましょうか……今回の議題は博麗霊夢についてね」

第六紫が議題ボックスからカプセルを取り出しそう答える。霊夢の事ね……多分どの世界の幻想郷も似たようなもんじゃないのかしら。

「霊夢ね、彼女は馬術の天才よ。なんだって陰陽玉の回転すらこなしているのだから」

「努力家ね。元々ある才能もあつて幻想郷最強と言つても過言じゃないのかしら？」

「することがなくてゆったりしまくってるわね……何かさせてあげた方がいいんでしようけど……平和過ぎるのよねえ」

なんか、結構違うみたいね。世界から違うから当たり前って言つたら当たり前なのだけれども。ちなみに上から、第二紫、第八紫、ゆかりんである。

「うちの霊夢か……釣りが得意ね」

「博麗の巫女要素はどこ行つたのよ……私のところの霊夢は遂に幻想郷を支配し始めたわ」

「第九紫……こちらの霊夢はまた儲け話を思い付いていたわ」

「まあ、まだ始めたばかりだから大丈夫よ。ちなみに私のところは天才だけど努力を全くしないのが駄目ね」

今度は上から、第十紫、第九紫、第三紫、最後に私である。

「私のところは既に妖怪になつてるから特に言うことは無いわね」

「……みんなの所の霊夢って博麗の巫女の筈よね？」

「巫女が妖怪化とか大変ねえ」

「ゆかりん、そんな簡単に済ませていい問題じゃないと思うわ」

妖怪化って……第四紫は一体何をしていたのかしら？て言うか、こう聞いてみると自分のところはかなりましと、思えるわね。毎日の疲れが取れていく気がするわ……更にゆかりんで癒される……。

「うちじゃあ、霊夢が問題を起す事なんて無いわ。才能はたっぷりとあるけど」

「第十一紫のところは全体的に天才だものね」

「そう言えば釣りだけじゃなかったわ。亀に乗って空飛んだりもして  
るようよ」

「あゝあ、そっちの方は空が飛べたわね。全く、羨ましい」

「馬に乗って移動するのも楽しいと思うわよ?」

「……ゆかりん、第二紫は馬に乗って移動している幻想郷の紫よ?」

第二紫の所は空を飛べないのが普通……なんか十一個も幻想郷が  
あるって考えてみると把握できてない幻想郷もかなりありそうなの  
のね。

「へえ……色んな幻想郷の霊夢は面白いわね。まあ、一番可愛いのは  
うちの霊夢だけど」

「……………黙れ第一紫……………」

「あらっ? みんなどうしたのかねえ、ゆかりん」

「そうねえ……みんな息ぴったりで羨ましいわ……」

「第一紫? お前ごときがゆかりんに話しかけないで?」

「あらあら、みんな同じ紫なのにおかしいのではなくて?」

「あなたが私達と同じ姿、名前をしているのが本当に嫌ね」

「ん……なんでこんな嫌われてるのかしらね?」

「自分と自分の世界を見て考えたらいいんじゃないかしら?」

……またケンカが始まったわね、まあ、いつもの事だから仕方ない  
とも言えるのだけど。第一紫は常識から見たら本当に気持ち悪いの  
に、私が常識みたいなオーラを出してるから嫌われるんじゃないか  
しら……。まあ、あと数十分もしたら収まるでしょう。それまでコー  
ヒーでも飲もうかしら。

コーヒーに砂糖を一つ入れて、飲み始めた。

「じゃあ、今回も話し合いましたよ? ……議題は吸血鬼異変について  
ね」

吸血鬼異変……あれは結構大変だったわね。弱くなってしまった妖怪達が大量に吸血鬼の傘下に入ってしまったものね……あのときは、幽香とか幽々子とか萃香が手伝ってくれたから制圧できたけど、幻想郷の危機といっても過言じゃなかったわね。あの一件でスperlカードを使うルールを作った訳だし……他の世界の幻想郷はどうだったのかしら？

「ああ、あれね。結構な数で攻めてきから、私が偵察に行ったら解決しちゃたやつね」

「第二紫……偵察って相手の様子を見に行くのであって、様子を見るついでにボッコボコにする事じゃあ無いのよ？」

「ええ、分かってるわ。相手のボスの様子を見ようとしたのだけど、色んな奴らが邪魔してきたから倒して行っただけであって、肝心のボスも強くなかったしそれで私を帰そうとしなかったのだから……ついね？」

「前々から思ってたけど第二紫って結構な強さよね……うちの霊夢に勝てるかしら」

「霊夢による幻想郷を支配を止めるのは自分の所でやってちょうだい。私は愛馬の手入れで忙しいのよ？」

多分、第二紫の所だから馬に乗って戦ったのよね？私じゃあ、馬に乗るのも大変で戦いなんてできなさそうね。けど、弾幕ごっこを馬を合わせたら案外楽しそうな気もするわ……馬に乗る練習でもしてみようかしら？

「私の所はあれね、霊夢がなんとかしたわ」

「霊夢が？その頃、霊夢は三、四歳でしよう？」

「え？去年の事だから、普通に十二歳よ？て言うか、霊夢が妖怪だってあれで確信したんだし」

「その時、霊夢が何をしたのよ……」

「攻撃を喰らったかと思ったら、体が赤くなって身体能力が増してたわね。そして、手が口が変わって妖怪達を次々と喰らって行ったわ……普段は人間の姿だし妖力も無いから人間だとは信じたいのだけど……」

……確かにそんな姿を見たら人間とは信じがたいわね。妖力を普段は押さえてるって思った方が良さそうだわ。て言うか、吸血鬼異変が起こった時期も幻想郷によって違うのね。全部、ある程度似た世界だから事件が起きた時期も同じだと思ってたわ。

「まあ、私の所も基本的に他の幻想郷と一緒に。違うところといえば、最初は傘下に入った妖怪もコードから消滅させようとしたところかしら?。」

「第十一紫?。その世界の常識はこっちの世界の常識じゃないのよ?。」

「分かってるわ。ただ私はそっちの世界では見つかってないだけでそっちの世界にもコードはあると思うけど」

「そんな、良く分からないけど恐ろしい物はあっても見つかって欲しくないわね」

まあ、第十一紫の所は普通の人でさえ、私の所の永琳以上に賢いものねえ……あそこの幻想郷の常識に触れたくない……知ってはいけない何かまでも知ってしまいそう。

「でも、あんまり違いの無い第七紫、第三紫の所は私の所とほとんど同じじゃないかしら?。突然きた吸血鬼に強い妖怪連れて行ってポコポコにしたのがうちの吸血鬼異変だけ」

「へえ、第九紫の所も同じなのね。霊夢に支配されてるとは思えないわ」

「されかけてる!。まだ、されてはないわ」

「ほぼ、同じだと思うわよ?。まあ、吸血鬼異変の方は私の所は二人と同じ流れみたいね」

十一個も幻想郷があれば同じ感じに解決してるところもあるし、違う風に解決している所もあるものなのね……第二紫の解決方法にはちよつと引くけど。

「私の所は突然館ができたものだから、しばらく様子を見ていたのよ。けど、何も起こらないものだから物は試しって感じにスキマで突っ込んだら幻想郷の環境に馴染めずぐったりしていたレミが……」

「……レミ?。あのレミアアとか言う吸血鬼の事よね?。」



「ええ、私はそう呼んでるの。で、さっきの続きだけど恩を売ってやろうと館内の境界を操って過ごしやすい環境にしてあげたらレミに凄いなつかれて……」

「で、仲良くなったという訳かしら？」

「ええ、そういうことよ」

第八幻想郷のレミアア……うちの幻想郷のレミアアからしたら想像つかないわね。カリスマの塊みたいな所があるし……地味に従者も恐ろしい能力を持ってたりするのよ。本当に嫌なやつね！

「私の所はそもそも話し合いで解決したから吸血鬼異変なんて起こって無いわ。まあ、この前起きた異変で博麗神社がお化けで埋め尽くされていたけど」

「それは、大変そうね……問題は解決したのかしら？」

「ええ、解決したわ。霊夢が異変の黒幕を封印してね……まあ、最終的に逃げられたようだけど」

第八紫と一緒にそもそも吸血鬼異変が起こらないというのもあり得てるのね……そうだとするとうちのところは結構ピンチだったんじゃないかしら？

「私の所も話し合いで解決したわね。話し合いというか、ちよつと雑談した、程度だったけど」

「おお、ゆかりん奇遇じゃない。うちの所も話し合いで終わったのよ？」

「そりゃあ、自分自身と戦おうとするやつなんて居ないわよ。でも、少しだけ安心したわ。第一紫もちよつとした常識は持っているのね」

「幻想郷に何百年も暮らしているのだから常識が身に付くのは普通ではなくて？」

「あなたの幻想郷で常識を語るのはやめていただけるかしら？」

……またケンカね。と言うか、毎回、第一紫と他紫はケンカになるわねえ……あれっ、そういえば。

「第六紫は自分の所の幻想郷について語らないわよね」

「まあ、私はまとめ役みたいな所があるもの……それに人それぞれの強さが違うだけであなたの幻想郷と同じなのよ」

「へえ……数字が隣だからかしら」

「もしかしたらそうかも知れないわね」

基本的に議題決めるときぐらいしか第六紫は喋らないからずっと疑問に思ってたけど、案外私の所と一緒になのね……なんかちよつと安心したわ。

私はケンカから目を逸らしながらそう思った。

## 八雲紫会議 その2

「じゃあ今回も会議を始め——」

「少し、話を聞いて貰って良いかしら？」

「……話によるわね」

議題を引こうとする第六紫を止め、第九紫が話をし始めようとしている。いつもなら何だ、何だと騒ぎ立てる紫も居ただろうが今回は誰も何も言わない。何故なら、第九紫はいつもならあり得ない程の真剣な顔で話をし始めたのだから。

「……とりあえず話して貰って良いかしら？内容とは言っても言ってもらわなきや分からないもの」

「そうね……それじゃあ話を始めるわ」

一体、第九紫に何が起こったのか。私達八雲紫に話さなければならぬ事とは一体何なのか……ここにいる全ての八雲紫が第九紫の話を聞くことに集中した。

「遂に妖怪の山が霊夢に支配されたわ」

「じゃあ、議題を決めるわ——」

「ちよつと待ちなさい！」

「——うるさいわね、何よ」

「うるさいわねじゃないわよ第六紫……なにかもうちよつとあるでしょう？妖怪の山が霊夢に支配されたのよ？」

「他人の幻想郷とかそんなに興味無いもの」

「マジですかこの八雲紫……ほつ、他の皆は？」

第九紫がそう言うのととても静かな空間が出来上がる……まあ、凄い重要な事かと思っただらねえ、そんなにたいしたことじゃあ無いっぽいもの。

「……まあ、頑張つてちようだいな」

「ゆかりん!？」

「妖怪とか外の世界の人物に支配されたなら重要でしょうけど……霊夢は博麗の巫女だし大丈夫なんじゃないかしら」

「誰に支配されかけようと、一つの所に力が集まるのはいけないのよ

……」

まあ、その気持ちは分からないでも無いのだけど……それを別世界の私達に言われてもね？正直自分の所だけで精一杯だから手助けなんて出来ないし……第九紫の所の霊夢強そうだし……。

「で、そろそろ議題を決めて良いかしら？」

「良いわけ無いでしょ!？」

「けど、多分皆こう思ってるわよ？頑張れ、私は知らんって」

「そっ、そんな事は無いわよ……ね？」

また誰も喋らない……と言うか、第六紫がここまで喋ってるの珍しく無いかしら？いつもは議題決めたらそこから無言って感じだし……第六紫って結構ポーカーフェイスで表情がいつも読めないのよね……第二紫でも表情は読めるのに。

「ほら、第九紫これが現実なのよ？」

「……そうだ！第二紫！第二紫なら強いし……」

「じゃあこれが見えたら手伝ってあげてもいいわよ？」

「本当に!?!?!それを見ればっ——!！」

第九紫が驚いたのも無理は無いと思う。第二紫が立ち上がったかと思うと突然姿を消したのだ。スキマを開いた訳でも、妖力が使われたようにも見えない。ただ、第二紫は立ち上がった瞬間にその場から消えたのだ。

慌てて私は周りを見渡す。しかし、周りには自分を含めて十人の紫しか居らず第二紫の姿はどこにも居ない。周りの紫達も周りを見渡している……正確には第一紫と、第十一、第六紫以外の話だが。

「へあ?！」

「やっぱり見えてなかったみたいね……じゃあさっきの話は無しよ」

変な声に驚き、そちらの方向を向くと第九紫の首に手を回している第二紫が居た……どういうこと？

「……どうやって消えていたのかしら？」

さっきので思った疑問をありのまま第二紫に聞いてみる。第九紫と第二紫の距離はまあまあ遠い。と言うか、そんな事の前にここから消えた方法を知りたかった……もしかしたら私も使えるかもしれない

いし。

「私はただ妖力を少し出しただけよ。そして貴女達がそれを認めたくなくて私から目を逸らしただけ……実際には見えているのに貴女達が見えてない振りをしていたのよ。残念ね、見えたのは第十一紫と紫の恥の第一紫だけみたいね」

ちよつと妖力を開放しただけで目を逸らしてしまう……？第二紫って化け物なの？

「あら、貴女としたことが数え忘れてるわよ……第六紫も見えていたわ」

「……本当？第六紫？」

「……まあ、見えてはいたわ。見る気はなかったけど」

「そう、なら貴女にも試してみるわ」

第二紫がそう言ったあとまた第二紫が見えなくなる。それに対して第六紫は目を動かすらしい……本当に見えているのかしら？もしかして見栄を張ってしまっただけなんじゃあ……そう、思った時だった。第六紫がゆつくりと左手を挙げる。そして、顔の位置で止める。

「ちよつとした冗談……ね？」

そして、顔を振り向きながら第六紫がそう言う。手を置いた場所には第六紫に向かって伸ばされた手があり、その先を見ると第二紫がいた。

「……それはどういう意味かしら？」

「そのまんまの意味よ、たまには言葉をしっかりと受け取ってはどうかしら？言葉の裏ばっか考えても楽しくないわよ？」

それは明らかかな第二紫への挑発だった……なんでここで挑発をするのよ？て言うか、第六紫にはちゃんと第二紫が見えていたのね。顔を全く動かさないものだから見栄を張っただけかと思っただけ……。

「そう……第六紫ちよつとごめんなさいね？」

「どうしたの？」

第六紫がそう聞き返した瞬間、第二紫と第六紫がスキマに入って消

えていく。慌てて周りを見渡すと、少し離れた所に二人は居た。

「じゃあ、始めましょうか」

「あらあら……これは一体？」

「単なる模擬戦闘よー！」

第二紫がそう言った瞬間、スキマから槍を取り出した。そしてそれを回転させると……槍が増えた！えっ!?

「槍がどんどん増えてる……」

「あんなの科学的にあり得ないわ!？」

「……ゆかりん、私達妖怪がそれを言うのかしら？」

なんでショートコントみたいなのを……て言うかそんな場合じゃないわ、また第二紫が消えてる。第六紫は見えてるのだから意味無いでしように……。

「いえ……今回は私にも見えていないわ」

「……本当に、第十一紫？て言うか、今私の心を読まなかったかしら？」

「ええ……目で何かを追ってるのを見るにあのゴミ第一紫は見えてるみたいけど」

「はーい、ゴミ第一紫よ？呼んだかしら？」

「呼んで無いから帰りなさい……土に」

「あーら、辛辣ねえ……」

とりあえずめんどくさい第一紫無視して第六紫がいる方を見る。槍は五十本を越えているように見えるほど増えておりまだ第二紫は見えない。て言うか、第六紫全く焦って無いわね……まだ槍は動いてないとはいえ凄い迫力でしように。

スキマを開いた？槍がある方ならともかく、なんで自分の後ろに……。

「……やるわね」

「第一紫？貴女には何が見えているの？」

「貴女は私に特に何も言わないのね」

「そう言うのいいから」

「はいはい……とは言ってもたいしたものじゃあ無いわね。第二紫の

後ろからの蹴りをスキマで回避したってだけよ」

第十一紫にも見えない第二紫をスキマで回避した……それってつまり。

「第六紫にも第二紫が見えてるって事ね」

「……私の考えってそんな読まれやすいのかしら？」

そんな事を聞いてみたが答えは返ってこない……目線を第六紫に戻すと、百本を越えているように見える槍が次々に第六紫に襲いかかっていた。だが、第六紫は次々と槍を避けている……いや、避けているのではない。自然と槍が第六紫を避けているのだ。

「境界の操作でもしてるんでしょうね。じゃなきゃ、第二紫があえて当てようとしてないって所だけど……あつ、またスキマで回避したわ」

あれだけの数を一気に境界で操作できるものなのかしら？多分、第一紫が言ってる通りだと言うなら、スキマを開いた時は第二紫の攻撃を回避している訳だし……第二紫も見ながらやってるって訳よね……あつ、第二紫が見えるようになった。

「見られているって事を確信したんでしょうね。槍の攻撃を止めないのは意識をその分逸らせるだろうって考えでしょうけど意味ない風に見えるわね。第六紫、一步も動いてないみたいだし」

そんな事を第一紫が言ったので、第六紫を観察してみる……本当だ、一步も動いてない。動かないで良いからこそ能力の方に集中できたのかしら……それでも頭おかしいわよね。なんか私の中で第六紫がとんでもない存在へとかしてるわ。

「まあ、けど第二紫の準備体操も終わったみたいだし、もうあのままじゃあいかないでしょうね」

「……あれで準備体操？」

嘘でしょ？ほとんどの紫達が目を逸らしてしまう程力を出して、一本の槍を何百本にしてそれを操りながら相手に攻撃を仕掛けているの？

「言っておきますが、第二紫の本気はあんなもんじゃあすまないわ。扇子でコンクリートを切断するようなやつよ」

「……コンクリートを？扇子で？」

「ええ、ほら槍も一本に戻って片付けられたわよ。ここから第六紫がどうなるかね」

扇子でコンクリートを切断するってどこの漫画の強キャラよ……ってそれより戦いの方に集中しないと……ってあれ？

「第六紫が消えた……？第一紫、第六紫はどこに居るの？」

「申し訳ないけど私にも見えないわね。けど、スキマを開いたようには見えなかったわよ」

スキマを開かずに消えた……もしもそうなら第二紫と同じ方法で消えてると見て良いのかしらね？って、第二紫がキョロキョロしてるとことは……もしかして第二紫にも第六紫が見えていない？

「タネは第二紫が自ら話したんだから第六紫が真似できてるのは何も問題無いわ。ここで一番問題なのは第二紫すら見えてないって事ね」

「第二紫が本能から目を逸らしてしまう程の力……それって」

「第六紫がこの中で一番妖力があると思っくいんじゃないかしら」

第六紫が……一番強い……確か私の所の幻想郷と人それぞれの強さが違うだけで一緒って言ってたから……私の所の強化版みたいな感じかしら……。いや、そんなことを考えている場合じゃないわね。二人の戦いの方に目を移す。

とは言っても、第六紫が消えてから何も起こってない。第二紫が消えた第六紫がどこから来ても対応できるように首を降りまくって周りを見ているだけ……そう、思った瞬間だった。

第二紫の手がいきなり上に上がる。そしてそれと同時に第二紫の腕を掴んで上に上げる第六紫が現れたのだ。

「……！」

「あら、意外かしら？こう見えて私、臆病なのよ」

……第六紫は消えてからも一歩も動いていなかった。それなのに、消えた瞬間は少し離れた場所にいたはずの第二紫の手を掴んでいたのだ。

「流石にもう動いてるだろうって深層心理では思ってたんじゃないかしら？だからこそ、ゆつくりと本人が気づかないうちに第六紫が居た



場所へと移動していたのね」

「首を振る度に半歩、半歩……第六紫を探すのに集中していたなら自分かゆつくりと移動しているのにも気づかなさそうね」

けど、あの第二紫を一步も動かずになんて……どんな戦況を潜り抜けてきたらそんなことができるのよ……。

「これぐらいにおきましょ、第二紫。他のみんなが置いてきぼりよ」

「……そうね。終わりにするわ。けど、手を離してくれないかしら?」「ん?他の紫に迷惑かけたでしょう?まさか、謝らずに戻るなんてことはしないわよね?」

……第六紫ってあんな声を出せるのね。怖すぎるわ。人の声を聞くだけで恐怖を感じたのは初めてよ……。

「……八雲紫の皆さん、今回は非常に申し訳ないわね」「うん、それでよし!」

とても綺麗な笑顔で第六紫はそう言う……さっきの声を出した時はどんな顔をしていたのかしら?..

「うふふふ……第二紫、怒られてるわ、うふふふ」「よし、今から第一紫殺してくるわ」

「頑張つてきなさい。死んだら教えてちょうだいね?議題は『最高の今日』にするから」

「なんでっ!?!」  
……第二紫がんばえー。

## 八雲紫会議 その3

「じゃあ今回も会議を始めるわよ……議題は危険な人物ね」

「……「第一紫」……」

「……否定はしないけど自分の所の幻想郷の人物でお願いするわ」

否定はしないのね……言葉にして言った私が思うことでも無いかもしれないけど。議題は危険な人物らしいけど……誰を言うべきかしら？別に危険って訳じゃないけど厄介な人物はかなり居るのよね。

「私のところの危険な人物と言ったら……鬼人正邪かしらね。幻想郷を支配しようとしてるし、そのくせ私と同じくらいの妖力があるから厄介なのよね」

「第二紫と同じくらいの妖力……それ厄介で済ませて良いのかしら？」

「まだ使いこなせては無いみたいだから大丈夫でしょうけどまだまだ油断はできないわね。彼女と馬のコンビネーションは私も見習うところがあるもの」

……どうして第二紫のところって無駄に強い人物が多いのかしらね。私が第二紫の幻想郷の賢者なら胃がやられる自信があるわ。て言うか、鬼人正邪って誰なのかしら。

「あの正ちゃんが危険人物……こつちじゃあかなり優しい人物よ」

「たしかに正邪が問題起こすとか考えにくいわ……」

「えっ？あの正邪よ？塩を送ったら送ってきた人物の傷口に塗ってくるようなやつよ……」

「私も第三紫に賛成ね。指名手配すらされてるあいつが優しいとかあり得ないわね」

「……そもそも鬼人正邪って誰よ」

知らない人物が出てきてよく分からない話が続く中、第十紫が私の聞いたかった事を聞いてくれる。良くやったわ！第十紫！

「鬼人正邪は天邪鬼の妖怪よ。能力は何でもひっくり返す程度の能力で、性格はまさに天邪鬼って感じで人を喜ばせば自己嫌悪に陥り、嫌われれば喜ぶような感じで、素晴らしい私の相棒よ」

「霊夢から幻想郷を取り戻す為の仲間？」

「まだ支配されきって無いから！人里と妖怪の山と迷いの竹林しか支配されてないからー！」

「……もはや支配されてないかしらそれ」

第九紫に関してはもう支配されてるわね……ってそれより鬼人正邪の事よ。多分みんなところに居るのだから私のところにも居るのでしょうけど……とてもいい人には聞こえないわね。いい人って言うてるのもゆかりんと第八紫と比較的平和だから私のところじゃあ充てにならないし……どんな見た目か知らないけど警戒して置くことに越した事は無いわね。

「一応議題は鬼人正邪じゃなくて危険な人物なのだけど？」

「ああ、そういえばそうだったわね。私のところの危険人物は風見幽香かしら。放って置けば何にも問題無いのだけど……たまに向こうからやってくるのよね……」

「こっちの危険な人物……幽々子ね。あの大食いが更に食べるようになったら幻想郷食料がなくなるかもしれないわ」

「危険ってそう言う……私のところは間違いなく霊夢よ」

「でしょうね」

そりゃあ、第九紫のところは霊夢が危険人物でしょうね……て言うか話に聞きたびに支配されてる範囲が広がってる気がするのだけど……気のせいかしらね。

「そもそも鬼人正邪の話に持っていったのは誰なのよ」

「私よ」

「貴女だったのね」

「暇を持て余した」

「八雲紫の」

「遊び」

「ほらそこーショートコントをしない！」

……私達八雲紫ってかなりノリが良いのよね。スキマ妖怪はそういう感じになるものなのかしら？とは言ってもスキマ妖怪は私達しかいないわけだけど。

「危険な人物……外の人間が危険みたいなそんな感じかしら」

「そんな怖い話の落ちじやあ無いんだから……とは言っても危険な人物と言われてもあまり思い付かないわね……自分？」

「この八雲紫……自分を危険だと思ってるわ」

「危険からは逃げられないってことね」

こうして聞いてみると案外、危険な人物って案外思い付かないものなのね。私自身も思い付かないし……警戒の意味も込めて鬼人正邪を危険な人物として言っておこうかしら。

「あまり危険な人物と言われても思い付かないから、その鬼人正邪って人物を警戒の意味を込めて危険な人物にするわ」

「第七紫……それいいわね。私もそうするわ」

今回は第十紫となんか通じ会えた気がするわ……仲間が居るって結構安心できるわね。実は私のところと第十紫の所は似てたりするのかしらね。

「鬼人正邪は優しいのに……私のところは危険な人物は居ないわね」

「私のところもよ」

「ああ、今回は二人も仲間が居るじゃない。私のところも危険な人物なんて居ないわね」

「そりゃあ、自分しかいないのに危険な人物が居るわけがないでしょ」

「ん？私のところにも霊夢などの他の人物は居るわよ？」

「……もう手遅れでしょうね。最初から分かってたけど」

……本当に第一紫のなかじゃあ、あれが常識なんでしょうね。第一紫ほど理解できない恐怖を体現している存在はなかなか居ないと思うわ。

「一体何が手遅れなのか、良く分からないわね？」

「この前も言ったでしょうけど自分の世界と他の人の世界を見比べてきなさい。それで分からないようならそれまでよ」

「世界はそれぞれで違うのは当たり前ではなくて？」

「はあ……根本的なのところの話をしているのよ」

……また長くなりそうね。ちよつとだけ、仮眠でも取ろうかしら……よし取ろう。

私は思考を止め目を閉じた。

「えっと今回の議題は……大変な事ね」

大変な事……いっぱいあるからどれを話せば良いのかしら。一番大きな事を言えればいいんですけど、どちらかというところと小さな大変な事が積み重なっているような感じなのよね……。

「私のところ大変な事と言えば……やっぱり霊夢が幻想郷を支配しようとしてるところね」

「貴女のところはそうでしょうね」

「むしろそれ以外に何があるのよ」

第九紫のところの大変な事は予想通りね。て言うか、それが大きすぎて他に大変な事が起きても霞んで気にしなくてもいいぐらいになってそう……。

「私は愛馬の手入れかしらね。けど、ある程度は楽しさを持ってやれてはいるわ」

「第二紫のところは馬との絆が深い人物が多いわよね」

「むしろそんな人物しか居ないわ」

幻想郷の住民全員が馬を大切に育てている……別に馬限定じゃなくてもいいのだけど全員が一つを大切にしているっていうのは憧れるわね。

「大変な事ね……結界の管理とかかしら」

「あくあ、それは分かるわね。ある程度は霊夢に任せるとはいえ、私もやらないといけないもの。案外あれ、疲れるのよね」

良く考えればどこの幻想郷にも結界はあるわけで、それを管理しているのは幻想郷を作った私達なのよね……もうちよい信頼できる人物が増えれば結界管理とかも任せられるのに。

「大変な事といえば、晩御飯を毎日考える事かしら」

「……賢者だったらもうちよい大変な事とか無いかしら？」

「て言うか、藍に任せず自分で作っているとこもあるのね。私は賢者

の仕事で忙しいから家事とかは藍に任せてるわね」

「冬眠しているときは藍に仕事も任せつきりだものね……何かしてあげた方がいいんでしょうけど」

確かに冬眠しているときは藍にかなりお世話になってるわね……ありがたいの感謝の気持ちを込めて今日の晩御飯は私が作ろうかしら。

「冬眠……？」

「なんで冬に寝る必要があるのよ」

「……逆に貴女たちは寝ないのかしら？冬は寒いわよ？」

冬は寒いし、冬までである程度力を使ったりしてからのだから寒い冬に休憩して力を取り戻した方が効率いいでしょうに……。

「冬って良い季節じゃない。寒いのも一興よ。その間に何かあったらどうするのよ」

「その時はちゃんと起きるわよ……完全に眠ってる訳じゃないんだもの。例えば……結界とかが緩んだらさすがに起きるわね」

「私は冬眠はしてないけど、冬には南の島に行ってるわね。暖かくていい場所よ」

「だいたい八雲紫は冬には何かしらの方法で休んでいると思ってるのだけど……違うのかしら？」

「ええ、私は冬でも活動するわよ。冬は冬なりの宴会が楽しめるもの。それにチルやレティとも会いやすくなるものね」

……第八紫ってどんな人物とも仲良いわよね。全員をあだ名で呼んでいるのかしら。

「ハイハイ、また議題がズレてるわよ」

「あつ、本当ね……私の大変な事は何かしらね？」

「知らないわよ。自分の事は自分で考えてちょうだいな」

「そうよね……あつ、あれよ。人里でスリが多くなってるわ」

「……なんかしようもなく感じるわね」

それ、人里の大変な事だから八雲紫の大変な事では無いんじゃないかしら……まあ、人里も管理しているならそれが大変な事なんですよけど。

「私はあなた達をまとめるのが大変ね」

「……言ってくれるわね第六紫。第二紫やってしまいなさい！」

「この前私が第六紫に手も足も出なかった事を忘れたのかしら？」

「あっ……」

「槍はあんなに出してたのにね」

「手も足も出たのに槍は出た……？はっ！閃いつ」

第三紫がそう言った瞬間に第三紫がスキマの中へと消えていく。そして、微かだが悲鳴がスキマの中から聞こえてきた……すぐ聞こえなくなってしまうが。

「本当に、まとめるのが大変ね」

「……第六紫。第三紫はどこに？」

「さあ？いきなりスキマに入って行くのだから突然見過ごせない用事でもできたのではないかしら？」

「けど、悲鳴が聞こえたわよ」

「私は聞こえなかったわね？幻聴ではなくて？」

第六紫に恐れる事なく次々に質問していく第十紫。私なら途中で怖くなってやめてしまうでしょうけど……第十紫はすごいわね。他の紫も動けてないと言うのに。

「いえ、微かだったけど聞こえたわ。あのスキマができたところからね」

「……もしかしたらまた幻聴が聞こえるかも知れないわね。第十紫以外のゆか——」

「ごめんなさい、ただの幻聴だったわ」

「……なら、それでいいのよ」

撤退するの速すぎない？いやまあ、自分もあれをされたくないのも分かるには分かるんだけど……なんか凄イと思った私が恥ずかしいわ。

「じゃあ、一人減ったけど会議を続けましょうか……ね？」

「賛成。いつまで重い空気で居るつもりよ」

第六紫に続いて第一紫がそういう……いつもならみんながいろいろ言ってたんでしょうけど向こうには第六紫が居るものね。みんな

大人しくしておくしかないと思ってるんでしょう。私もそうだけど  
一応、会議は続いたけどいつもの雰囲気にはならなかったわ。



## 八雲紫会議 その4

「みんな集まってないけど議題だけ先に決めておこうかしら。議題は――」

「ちよつと待ってくれるかしら?」

「……ゆかりん?どうしたの?」

第六紫の議題を決めようとしたところをゆかりんが止める……ゆかりんが何かを止めてまで発言するのは珍しいわね。一体、何があったのかしら?」

「第六紫と第七紫……あなた達にとあるゲームをして貰いたいのよ。まだみんな集まってるわけじゃないし」

「ゲーム?どういう物なの?」

「私達にさせようとするところには突っ込まないのね」

「そんなの私はまとめ役だから頼んだらやってくれそうって言うのとその隣の数字の紫に任せようと思っただけでしょ?」

「その通りよ……第六紫は賢いわね。羨ましいわ」

……私はついでか。まあ、特に声を荒げて怒るようなことでも無いから特に何も言わないけど。ゲームって一体何なのかしらね。

「元々は私のところで異変が起こった時用に作ったゲームなのだけど……」

「全く異変が起こらないから使われなかったと」

「そう!このままだと腐ったままになってしまうのよね……他の人がやっているところを見たかったのに」

「ああ、それで私達に頼んだって訳ね」

「うん……で、やってくれるかしら?」

第六紫と目を合わせる。断る理由もないし……ゆかりんの作ったゲームってちよつと気になるわね。やろうかしら。

「分かったわ。その頼み受けるわ」

「私もまとめ役として受けようかしら」

「ありがとう、第六紫と第七紫。じゃあ、これを持ってくれるかしら」  
そう言われて、小さな青い石を渡される。どうやら第六紫も渡され

たようだ。これの石がゲームに何か関係あるのかしら。

「ちよつと待ちなさい……その二人がそのとあるゲームをやっている間、私達は何をするのよ」

「……私と観戦ね」

「第六紫！第七紫！ゲーム内容は分かんないけど盛り上がりがないゲームはやらないようにね！」

「ポップコーンまで持って……第十紫はノリノリね」

第十紫準備速すぎじゃないかしら……って周り見たら第三紫も、第九紫もジュースとかお菓子とか持つてるわね。境界を操る能力って本当に便利ね。

「そうだ、ただゲームをやるだけじゃつまらないから負けた方には何か罰ゲームをつけていいんじゃないかしら」

「えっ……ちよつと待ってゆか——」

「それはいい考えね。じゃあ、負けた方に黒歴史でも晒してもらったらどうかしら？」

「……そんな横暴が認められるわけな——」

「よし、それにしましょう」

「ちよつとゆかりんっ!」

なんか関係無いところで罰ゲームが決定したのだけど……覚悟を決める必要がありそうね。

「そろそろ、ゲームのやり方を教えてくれないかしら」

「ああ、そうね。とは言っても、その石を合わせるだけよ。後は、出てくる者が教えてくれるわ」

「……出てくる者って？」

「とりあえず合わせた方が速いわ」

そう急かされ、石を合わせる。すると石がいきなり光り輝く。そして、光りが消えたかと思うと私達の目の前に八雲紫が立っていた……どうということよ。

「お二人共始めまして、司会役のドツペルゲンガーよ。早速だけどルールを説明して良いかしら？」

現れた八雲紫がそう言う……いや、八雲紫ではなくてドツペルゲン

ガーと言うべきか。これ、どうやって出現したのかしら……いや、それより先にルールを聞くべきね。

「ええ、聞くわ」

「聞かして貰うわね」

「では、説明していくわ。今回やるゲームは呼び出せ妖精よ」

「……呼び出せ妖精？」

一体何なのよそのゲームは……いや、まあ今から説明してくれるんでしようけどこんなタイトルから推測できないゲーム無いでしょ……。

「ルールは簡単よ。ここに十四枚のカードがあるんだけど……そのうち十三枚は白紙。そして一枚だけ妖精の絵が書かれてあるわ」

そう言つてドツペルゲンガーは妖精の絵が描かれたカードを見せてくる。そして他の十三枚のカードの中に混ぜてシャッフルしたあと、いつの間にか用意されていた机に並べていく。裏は全て同じでどれが妖精のカードか分からなくなった。

「このカードを一枚ずつ引いて貰うわ。そして、妖精を引いたら妖精宣言ができるの」

「ルールの説明途中で知らない用語を出される気持ちがあった気がするわ」

「妖精宣言をしたとき、その時自分が持っていたカードをポイントとして獲得できるの。勿論、相手の持っていたカードはポイントにはならないわ。これでラウンドを終了する」

「最終的にそのポイントを多く持っていた方が勝ちということかしら？」

「ええ、その通りよ」

……かなり運が関わるゲームね。あんまり頭脳を使わないなら、第六紫に勝てるかしら。

「勿論、ルールはそれだけじゃあないでしょ？」

「ええ。妖精を引いたとしても妖精宣言をしなくても良いの。その場合にはそのまま残りのカードを引いて貰うわ」

「……それ先に妖精カードを引いた方が勝たないかしら」

「いいえ、このゲームには妖精宣言以外に、誘拐宣言があるわ」

誘拐宣言……なにその犯罪臭のする宣言。第三紫なら何か思いついてそうね。

「この宣言をしたとき相手の持っているカードを見るわ。そして妖精がいたなら相手の持つている妖精以外のカードを貰ってそのラウンドを終了するわ。逆に持つていなかった場合、自分のカードを相手に上げてそのラウンドを終了するってわけね」

「……何故妖精カードは渡さないの？」

「ああ、言い忘れていたわ。妖精カードだけはマイナスポイントなの。つまり一枚目から妖精カードを引いて妖精宣言をしても負けるだけってことね」

つまり、ポイントを手に入れるためには最低でも妖精カードと二枚の普通のカードが要るってことね……。

「宣言できるのは自分がカードを引いた後、能力は使えないようになっていくからそこら辺は気をつけて。あと、イカサマは基本的に駄目だからイカサマを見つけたらゲーム中に言っちゃおう。今回は五ラウンドでやるわ」

とりあえずまとめると勝つためにはポイントが必要で、ポイントを多く手に入れるためには妖精を持ちながら粘るか、妖精を持つている状態で誘拐宣言をされないように速めに終わらすか……そもそも妖精を回収できなきゃ相手を疑う必要もあるってことね。

簡単なルールだけど考えなきゃいけないところはありそうね……まあ、いいわ。とりあえずやって見ればどんなゲームだって分かってくるわよ。

「じゃあ、お互い椅子に座って」

よく見れば机だけではなく椅子も用意されている。本当にいつの間……いや、いいわ。とりあえず座って早く始めましょう。私が座ると、第六紫も向かい側に座った。

「じゃあゲームをスタートするわよ……先行は八雲紫からね」

ドッペルゲンガーが第六紫を指差しながら言う……こういう時に同姓同名って辛いわよね。だから、第〇紫なんて呼び方することに

なっただけだ。

「じゃあ引かせて貰うわ」

そして八雲紫が十四枚の中から一枚引く。このゲームは後半になってから動き出すゲームだから前半はあまり考えずにやっていこ  
「妖精宣言をするわ」……えっ？

「妖精宣言を了解。一ラウンド目を終了し、八雲紫はマイナス一ポイントを獲得するわ」

……えっ？ いや、ちょっと待って？ 一枚しか引いてないのに妖精宣言？……は？

「二ラウンド目を開始。ポイントが少ない方からスタートよ」

「じゃあまた私ね……おっと妖精宣言よ」

「妖精宣言を了解。二ラウンド目を終了し、八雲紫はマイナス一ポイントを獲得するわ」

「ちよつと待ちなさい！第六紫！」

なんで一枚目から妖精を引いてしかも妖精宣言をするのかしら——というより、しれつと二連続で妖精カード引いてるけど百九十六分の一でしょ!?

「どうしたのかしら？」

「あなた一体何を考えているのよ……ルール聞いてた？」

「あら、ルールのには問題は無かった筈よ」

「ええ、そうね。ルールのには問題は無かったわ。けど、勝利を求めるとは思えない……ハンドェのつもりかしらね？」

もしも、妖精カードから貰えるポイントがマイナスでなければ第六紫の戦略も悪くないのかもしれない。だが、事実妖精カードから貰えるポイントはマイナスだ。一枚から妖精カードを引いて妖精宣言をしたとしてもマイナスポイントが貯まるだけで勝利には繋がらない筈だ。

「いいえ、ハンドェのつもりなんて無いわ。私は勝つつもりでやってるもの」

「……本当かしらね？」

「まあ、見てなさい。ゲームはここからだから」

そう言つて第六紫はカードを一枚引く。宣言をしないところを見ると妖精カードは引いていないようね……まあ、宣言をしてないだけの可能性もあるわけだけどらさすがに一枚目からまた妖精カードを引くことはさすがに無いでしょう。

私も一枚引く……妖精カードでは無い。まあ、そんな簡単に妖精カードを引けるわけないのだから当たり前ね。このままゲームは続くんでしよう……けど、第六紫が三枚目を引いた時第六紫は動いた。

「妖精宣言をするわ」

「妖精宣言を了解。三ラウンドを終了し、八雲紫に一ポイントを追加するわ」

……ますます訳が分からないわね。第六紫は何を考えているの？今一ポイントを獲得してもまだマイナス一ポイント残るのだから、妖精カードを引いたならせめてもう一枚引いてから妖精宣言すれば良いのに……誘拐宣言を警戒したとしてももう少し勝負に出るべきじゃあ無いかしら。

そして今度の四ラウンド。またもや、動いたのは三枚目を引いた第六紫だったわ。

「妖精宣言をするわね」

「妖精宣言を了解。四ラウンドを終了し、八雲紫に一ポイントを追加するわ」

「第六紫……あなたどれが妖精カードか分かってるわね？」

「……さあ？何の事かしらね」

「はぐらかしても無駄よ。第六紫、あなたは最初の二回目は一発で、後の二回も少なくとも三回目で妖精カードを引いている事になるわ。もしかしてこれを全て運がよかったですませるつもりかしら？」

次のラウンドは最終ラウンドだというのに、私達お互いのポイントはない。それは第六紫がそうなるように仕組んだからに決まってるわ。

「二応、妖精カードと他のカードを見させて貰うわね。ドッペルゲンガーさん」

「ええ、どうぞ」

許可も貰ったから妖精カードと真つ白のカードを手に取り裏を見比べる……変わりはないわね。なら、一体どうやって第六紫は妖精カードを……。

「ほら、カードにも仕組みは無いでしよう？」

「……カードに仕組みは無くてもあなたが妖精カードがどれか分かってるのは確定よ」

「あら、酷い言いがかりね」

「それぐらいのことをやってるのよ？」

て言うか、このままだと本当にヤバいのよね……もしも私が一発目から妖精カードを引いてしまった場合、第六紫がカードを引いて誘拐宣言をするだけで負けるし、第六紫が三枚目のカードを引く時に妖精カードを引いて妖精宣言をすれば私は負ける。

本当に第六紫が妖精カードがどこにあるか理解してなければ私は勝てないのではない……黒歴史を発表するのは嫌なのだけど。

「最終ラウンド。先行は八雲紫からよ」

私を指差しながらドツペルゲンガーが言う……やっぱりややこしいわね。て言うか、これで勝負が決まると言っても過言では無いわ。さあ、ここで本気を出すわよ！

「少し待ちなさい第七紫」

一番右のカードを取ろうとした私に第六紫が待ったをかける。

「そのカードは妖精カードよ？」

「……どうということよ？」

「言葉の通り、それは妖精カードって言ってるのよ」

……訳が分からなくなってきたわ。何故、それを第六紫は教えようとしているの？理解できない恐怖……今私に襲いかかっているのはそれだった。何か言い返さないと……。

「それは妖精カードの位置が分かることを認めたという事かしら？」

「ええ、そういうことよ。方法は教えないけどね」

「……信じれないわね」

「信じれなくて結構よ。そしたらあなたが負けるだけだけど」

……主導権を握られてるというのは辛いわね。まあ、もしこのカー

ドが妖精カードじゃなかったとしても他はまだ十三枚あるんだから大丈夫でしょう。そう思いその隣のカードに手をつける。

「それ、妖精カードよ」

「……」

もしかしてこれ……。更に隣のカードに手をつける。

「それ、妖精カードよ」

もうひとつ隣のカードに手をつける。

「それ、妖精カードよ」

「ふざけてるのかしら？」

「ええ、ふざけてるわ」

……厄介過ぎないかしらこの紫。もういいわ。最初の自分の勘を信じましょう。そう思い一番右のカードを手に取り捲る……。それは妖精カードだった。えっ？

思わず第六紫の方を見る。第六紫はただ笑顔でこちらを見ている……。ええ、もう一度言いましょう。厄介過ぎないかしらこの紫。

結論から言いましょう、このゲームで私は負け黒歴史を第六紫に晒しましたわ……。ちよつと数百年ぐらい眠ってくるわね。



## 八雲紫会議 その5

「今日と言う日にも関わらず、しっかりと会議に来てくださった八雲紫の皆さん。今日の議題はクリスマスでいきましょう」

「なんでちよつと前半煽ったのかしらね？」

「煽ってなんかいいわ。今日は特別な日だから皆さんにも用事があると思ってたのに、しっかり皆さんが揃ってくれたので感謝をしてるだけですよ」

「そういうのを煽ってるって言うのよ！」

「……なんでもう喧嘩が始まっているのよ。せつかくのクリスマスの日なのになんでそんな喧嘩っばやいのかしら。」

「気を沈めなさい、第十紫。ここにいる紫全員がそういうことよ」

「うっ」

「なんでこっちにも流れ弾が……」

「いつ、いいわよ。私には正邪が居るもの」

「独り身をみんな気にしすぎじゃないかしらね……賢者をやっているんだから忙しくて出会いがないのは当然だし、そもそも妖怪だから付き合うとかの思考もさほど強くないのに……」

「第九紫……そもそも正邪って女性でしょ？」

「えっ？女性なの？」

「えっ？第八紫？あの見た目よ？」

「逆に聞くけどあの見た目よ？」

「幻想郷が何個もあるんだからちよつとぐらい変わってることはあるでしょ」

「そもそも鬼人正邪を知らない私にとっては何を話してるのか良く分からないのよね……ヤバイやつなのか、女なのか男……はつきりしなすぎて訳が分からないわ。」

「それよりクリスマスよ、クリスマス。人里のイルミネーションが綺麗な日よね」

「うちの人里はイルミネーションなんてないから特に普段から変わらないわよ」

「私はサンタさんとやらが気になるわね」

「……第二紫？」

「だって、一夜で世界をトナカイと共に行き渡るのでしょ？そのスピードの秘訣を教えてほしいわね」

「ああ……そういう」

第二紫は何かずれている気がするわ。て言うか、第二紫の幻想郷はあまりクリスマスが広まってなさそうね。まあ、外の世界の人々がまだ忘れてない行事だから当たり前と言えば当たり前なのだけど……。それより、今日はクリスマスなのにケーキとかチキンは無いのかしら？」

「そんなのみんなそれぞれの幻想郷で食べてくださいな。ここはあくまで八雲紫による会議をするところなのよ？」

「あくまでって付けてるとところで、会議をやってない時があるのを認めてるわね」

「事實は事実だもの。揉み消すなんてできないわ」

そしてその会議をしてないときのだいたいが喧嘩している時なのよね……だいぶ前に目玉焼きには何をかけるかで喧嘩したときには、解決するのに三ヶ月はかかったわね……全く、目玉焼きには醤油と決まってるのになんであんなに争いあったのかしら。

「クリスマスプレゼント交換会的な行事は？」

「第一紫が居るから無理に決まってるでしょ？第一紫のプレゼントをもらった紫が可愛いそうよ」

「あら、酷いわね」

「第一紫の世界の物をこちらに持って来てほしくないもの。当たり前でしょ？」

第一紫のところは小石とかこっさり持ってこられるだけでかなり怖いものね……なんで第一紫だけ、あんな頭おかしいのかしらね。

「良く考えたら全員が1000年以上生きてるのに今さらクリスマスについてなんて語ることに無さすぎないかしら？」

「いい？話す内容は私達で決めていくのよ？」

「これだから話が脱線するのよねえ……まあ、私だってクリスマスに

ついでに語ることもなくていいけど」

「おい」

もう、私達はクリスマスではしゃぐというよりはクリスマスではしゃぐ子を見守るみたいな感じになってるものねえ……子なんていないけど。

「クリスマスってキリストの誕生日なのよね？なんで、あんなにはしゃぐのかしらね」

「そもそもクリスマスってキリストの誕生日じゃないらしいわよ」

「「「「「えっ？」「」「」「」」」」」

「詳しくは知らないけど、キリストの誕生を祝う日であってキリストの誕生日ではないらしいわ」

「ごめんなさい、ちよつと良く分からないわ」

……誕生日を別の日に祝うみたいなものなのかしらね？本当に良く分からないのだけど……まあ、そんなに考える必要はないでしょ。会議はクリスマスもいつも通り進んだ。

今日はクリスマス。それはどの幻想郷でも変わらない。せつかくだから覗いて行くとしよう。まずは第二の幻想郷から。

「このサンタとやらはトナカイで移動しているらしいわ」

「ああ……」夜にして世界を飛び回ることとはかなりのスピードを出しているに違いないぜ」

「けど、ただのトナカイがそんなスピードで飛び回れる訳が無いわ……確実に秘密があるはずよ」

「勿論だぜ。そしてその秘密を暴けば……」

「二次のレースは私の優勝間違いなし」

「こうしちゃいられん！サンタを捕まえに行くぞ霊夢！」

「ええ、捕獲して秘密を暴いてやるわ」

そんな会話をして二人は博麗神社から飛び立つ。そもそもまだ外の世界で忘れられていないサンタが幻想郷に現れるのかどうか……まあ、いい子の元に戻って来るといふのだからもしかしたら幻想郷の子供達の元へやってくるかもしれないが。

では、次の幻想郷へ。

「……クリスマスって言うのはキリスト教の行事だろ？完全にキリスト教じゃない霊夢が起こしていいイベントなのか？」

「いいのよ。金儲けの為にはどんな事でも利用するわ。それが異変であれ、どこかの行事であろうがね」

「異変は利用するなよ……」

「ハイハイ、そんな事言ってる暇があつたら手伝ってちょうだい。せつかくもみの木を手に入れたんだから飾り付けをしないと」

「へいへい、分かったよ」

今日博麗神社で行われる予定のクリスマスパーティー。霊夢と巻き込まれた魔理沙はその準備の為に頑張っていた。勿論、巫女にとっては金儲けの為だが人里の人にとっては楽しいイベントになることだろう。

では、今度の幻想郷へ。

「……チキンにケーキね。これあなた達が買ってきたの？」

クリスマスの夜、博麗神社に一人の巫女と三匹の鳥。だが、その鳥達は丸く大きく黄色い目がたくさんあったり、人型で体がとても痩せこけていたり、唯一まともなのは小さなかわいい鳥だけだった。

そして巫女の質問に鳥達はただ頷くだけだった。

「全く……次からは相談してから買いなさいよ」

その言葉に鳥達は頭を傾げる。まるで怒らないの？とでも聞いているかのようだ。

「もう過ぎた事よ。それに……買ったんだから食べないと損でしょ？ほら、あなた達も来なさい」

鳥達は喜びながら巫女についていった。

そろそろ、次の幻想郷へ。

「さあ、パーティーの始まりよ！」

レミリアの一言でクリスマスパーティーが始まる。吸血鬼なのにキリスト教のイベントを祝って良いのかとか言ってはいけない。彼女は自分が楽しければそれでいいと思っっているのだ。

だか、大きなイベントとも言えよう。真ん中には巨大なクリスマスツリーが飾られており、その周りに大量のケーキやチキンなどの料理が置かれている。勿論、テーブルの上にだ。

参加者も大量におりちらほらと人里の人間もいる。吸血鬼の開くものなので怪しがつて来ない人達の方が多かったようだが。それでも人里の人間が妖怪とも話せてるのも見るに、パーティー上ではみんな平等ということだろう。

パーティーは続く。夜が明けるまで。

じゃあ今度はこんな幻想郷。

「私の秘策を喰らいやがれ！」

「そんな事を言われて誰が喰らうと思うのよ！」

クリスマスだというのに誰もそれを祝うようなことは無い。誰もが、自らを鍛えようと訓練を続けていたからだ。それもそのはず、この幻想郷の住民は他の幻想郷の住民と比べてかなり弱いからだ。

だが、修行をし続けたこの幻想郷住民は既に他の幻想郷の住民の實力を越えている。不思議な幻想郷もあったものだ。

次の幻想郷は代わり映えしないので更に次の幻想郷へ。

「クリスマスがなんぼのもんよー！」

「クリスマス反対だぜ！」

クリスマスモードで盛り上がる人里の道を「クリスマス反対」等と書かれた看板を持ちながら歩く巫女と魔法使い。しかし、それだけではなく、後ろに天狗、妖怪山にある神社の巫女と神、池周りの妖怪等もいろいろ歩いている。邪悪な気持ちが無いのはなんとなくついてきた妖精程度ではないだろうか。

この祭りは最終的に八雲紫がみんなをスキマで連れていき、パーティーを開くことで収まった。

今度の幻想郷へ。

とある森の中、そこには妖怪の賢者と天邪鬼がいた。知つての通り八雲紫と鬼人正邪である。暗い森の中を照らすランプを中心に、二人は座っていた。

「なんですか？このケーキと酒は？」

「知ってるかしら正邪？今日はクリスマスなのよ？」

「ええ、知ってますよ紫さん。ですが、今の私達は反逆者、いつ敵に見つかるかも分からないのにそんなことを祝ってる暇があるとは思えません？」

「……そうよね」

正邪から正論を言われ落ち込む紫。そんな紫をかわいそうと思つたのか、はたまためんどうかいと思つたのか……それは正邪自身にしか分からないだろう。そこで正邪が言い直した。

「……仕方がないですね。今夜ぐらいは付き合つてあげますよ」

「正邪……正邪！」

「おっ、おい！八雲紫！離れろ！」

仕方なく、そう言うとすぐさま抱きつかれ、慌てる正邪。まあ、付き合ふと言つたのは自分なのだから自業自得だ。

更に次の幻想郷へ。

「御主人様……いつお眠りになるのです？」

「爺、決まつてるでしょ？この手でサンタを捕まえるまで起きているわ」

「御主人様……」

神社の中で座禅を組む巫女とプレゼントを隠し持った亀。二人の戦いは始まつたばかりである。

最後の幻想郷へ。

「おっ、魔理沙からプレゼントが転送されているわね。とりあえず立体化してと……へえ、扇風機ね。ずいぶん古いのを……なんかちよつと私も古いのを送ろうかしら」

科学がかなり発展した幻想郷。そこではむしろ古いのが人気だったりするので、毎日霖之助の店が繁盛している。勿論、クリスマスだって例外ではない。きつと、今も繁盛しているのだろう。

これがいろんな幻想郷のクリスマス。世界の数だけクリスマスの  
楽しみかたの数がある。では、最後にメリークルシミアス。

## 八雲紫会議 その6

「新年あけましておめでとうございますわ、八雲紫の皆様方」

「」「あけましておめでとうございますわ」「」

「」「おけおめね」「」

また今年が終わったのよね……正確には去年な訳だけだけど、そんな細かいことはどうでもいいのよ。どんどん時間が経つのが早く感じるわね。この会議も案外かなり長くやってるんじゃないかしらね。

「じゃあ新年初の議題を決めましょうか……議題は相棒ね」

相棒ね……まあ、藍でしょうね。昔からずっと私を手伝ってくれてる訳だし、藍が居てくれたおかげで今の幻想郷があると行っても過言じゃあないでしょうし……まあ、藍にその感謝を伝えられてはない訳だけど。

「やっぱり私の相棒はダークスね」

「……第二紫？申し訳ないけどダークスとは誰なのかしら？」

「私の愛馬の名前よ。毛が黒いからダークと馬のホースを合わせたのよ」

「……へえ、そうなのね」

……もしかしてだけど第二紫ってそんなにネーミングセンス無いかしらね？単純っていうかダサイというか……まあ、多くは語れないのだけど。第二紫ってなんか強すぎて怖いし。優しい方ではあるのだけどね？

「私の相棒はこたつよ」

「夏頃には去ってそうな相棒ね」

「多分夏頃はエアコンが相棒になってるわよ」

「私はエアコンじゃなくて扇風機派ね。エアコンって良くわからなくて……」

ゆかりんの自分的には議題に逸った事を言ってるんだらうけど、実際はちよつとずれてるのがなんか面白いわね。本当にゆかりんは癒しだわ。

「私の相棒は正邪よ」



「むしろ正邪以外に幻想郷を取り返す仲間が居るの？」

「ええ、居るわよそれなりに。あと、取り返すって言うともう既に支配されてるみたいになるから止めてくれないかしら。まだ無縁塚と三途の川、そこら辺の山はまだ支配されていないわ」

「ついに支配されていない場所だけ言うようになったわよ」

第九紫のところはねえ……もう、支配されてるってことでいいんじゃないかしら。ここにいる八雲紫でアンケートとっても絶対支配されてるといふことになるでしょうし……変なところでプライドあるわね。

「ここまで式神の藍が出てない件についてなんだけど」

「まあ、いろんな八雲紫が居るわけだもの」

「彼女は賢かったわ……けど、勇気が無かった」

「なんか第九紫が言ってるわよ？」

「霊夢に抵抗するって言ったたら、流石にアレには勝てないって見捨てられたらしいわ」

「見捨てられたって何かしら？主人は私の方なのだけけれど……」

……第九紫のところの霊夢ってどれだけ強いだよ。て言うか、支配する方法も知りたいわね。妖怪の山とかそんな簡単に支配される訳がないもの。絶対抵抗するわよあいつら、天狗。

「でも、大抵は藍が相棒な訳でしょう？」

「まあ、そりゃあそうよね。どの世界でも八雲紫の式神だもの」

「そしてどの世界も優秀なのよね」

「そして藍が八雲紫の相棒になるわけね」

どの世界もかなり違う点が多すぎるんだけど藍はどの世界も八雲紫の式神で優秀という点は変わってないのよね。八雲紫に近い存在だと変わる点が少なくなるのかしら？そもそも八雲紫がかなり違うのに……式神はほぼ変わらないなんてあるのかしらね？

「相棒とは言ってもそもそも信用できる相手が少ないもの。だったらほとんどが相棒に藍になるのも仕方ないとは思うわ」

「幻想郷を一応みんな管理してるものね。そう簡単に信用しづらいのも分かるわ」

「言ってることは賛同できるのだけどなんでそれを第八紫が言ってるのかしらね。貴女、凄く仲良くしてる人がかなり居るでしょ?」

「いえ、一応最初は恩を売るような感じで近づいているのよ? 気づいたら凄く仲良くなってるってだけで」

「普通そんなのあり得ないわよ」

第八紫って実は愛され系だったりするのかしらね。話に聞く限りだと誰とでも仲良くしてるのよね。純とサグサグとお茶会をしたって聞いたときは耳を疑ったわ……月まで侵略してるのかって……て言うか、その大きな存在の二人をあだ名で呼んでる時点でヤバイわよね……。

「ちなみに藍の式神の橙に八雲の性が与えられてるところはどれぐらいあるかしら?」

「あるわ」

「ないわね」

「そもそも仲間にはもう居ないわね」

やっぱりそこが違うポイントだったりするのね。私のところは与えてない訳だけでも。て言うか、だんだん第九紫がかわいそうに見えるてきたわ。

「私も相棒は藍かしらね」

「黙りなさいよ第一紫。あなたところは藍じゃなくて藍の紛い物でしょう?」

「酷いこと言ってくれるわね。藍は藍よ」

「第一紫に関してはその言葉も否定できるわ……そもそも第一紫の相棒は第一紫でしょう?」

「私が自分自身を相棒にしているように見えるのかしら?」

「ええ、見えるわ」

新年初喧嘩ね……喧嘩まで速すぎるのかしらね。いつもこんなものだったのかしら? 私はそこまで喧嘩には参加せずに見守る側だから良く分からないわね。まあ、適当に上でも見上げてたら終わるでしょうね。

私は適当に上を見上げた。喧嘩よ……早く終わりなさい。

「じゃあ会議を始めるわよ。議題は……趣味ね」

趣味……あまり自分で考えたことは無いわね。しいて言うなら幻想郷観察って所かしらね……いや、案外この八雲紫会議趣味と言ってもおかしくないんじゃないかしら。やってて楽しいもの。みんなはどんな感じなのかしらかね。

「予言しとくわ……第二紫の趣味は愛馬の世話ね」

「どうしてそれを……!?!」

「いや、普段の姿から普通に想像できるでしょう?」

「私には全く分からなかったわ……流石ね第十紫」

「いや、ちよっとゆかりん!」

「これが第十紫の実力って訳ね……恐れいったわ……」

「違うの!違うの!そうじゃないでしょう!」

……うわあ、何人かの八雲紫がにやけてるわね。この状況にはめられた時点で終わりよ、終わり。第十紫は御愁傷様としか言いようがないわね。

「……第七紫!あなたの趣味を聞かせてちょうだいよ!」

「えっ!?!いや……そうね、一旦私の趣味をなんだと思おうか言ってみてくれないかしら」

「いや……それはちよっと……」

「別にいいでしょう?どうせそう簡単には当たらないのだから」

「……まあ、そうね。ちよっと待ってもらえるかしら」

突然のキラークラスを渡されて少し戸惑ってしまったけど……どうってことは無いわね。それより先に趣味を決めておかないと……まあ、幻想郷観察でいいかしら。八雲紫会議は趣味っていうか恒例行事みたいなのがあるものね。

「第七紫ってあまり特徴が無いのと、まともなところが垣間見えるから結構趣味もあまり意外じゃない幻想郷観察とかじゃないかしらね」  
「……えっ?」

「この反応は……」

「当たってるわね恐らく。ここで初めて第十紫の意外な特技が分かったわ」

「いやいや当たってないわよ！ねえ！第七紫！」

「……当たってるわ。なんでこのタイミングで当ててきたのよ……」

いや、本当になんで当ててきたのかしらね。ここで外して、「さっきのは偶然だったみたいね」で済ませるところでしょう？なんで良く考えて完全に当ててくるのかしら……。何？特技なの？

「うっ……嘘でしょう？第七紫？」

「なんで嘘をつく必要があるのよ……」

「これがメンタリストってやつなのかしら」

「一応、長い付き合い同士なのだから分かる人は分かるんじゃないかしらね。第十紫、私のも予測してくれるかしら？」

「あっ……分かったわよ第六紫」

そう言っただけでまた考え込む第十紫。これ、当てたら当てたで言われてなんか謎の雰囲気が出て、外れたら外れたでいろいろ言われそうね……あれ第十紫詰んでないかしらこれ。まあ、どうせ十回しか続かないでしょうし大丈夫なんじゃないかしらね。

「第六紫はあれね。あまり語らない強者って感じだから趣味もずっと修行してるとかがありそうよね」

「……当たってるわね。驚いたわ、いつからそんな特技を身に付けたのかしらね」

「……へっ、へえ凄いわね第十紫。百発百中じゃない」

「求めてない……こんなの求めてないわよ……」

突然みんなが静かになり、微妙な空気が流れる……これは辛いわね。状況としては第十紫の新たな特技が見つかったただけなのだけど、それが趣味当ててみたいなのが悪かったんじゃないかしらね。趣味って性格が出るものだから、趣味が当てられるということは性格も当てられてるといふことだもの。

みんなに見せてる性格だけ当てられるのならまだましも、裏の性格というか……隠してる性格みたいなのがバレたら普通は嫌だもの。

例えば残念な性格を隠してるんだったら、このエリート八雲紫が並ぶなかで一人だけ残念な八雲紫扱いされるのはかなりキツイわよ、絶対。

「八雲紫の皆さん？会議よ、会議。わざわざ八雲紫を十一人集めて無言で座ってるだけのために呼んできたと思ってるのかしら？」

「……まあ、そうね。いちいちこんなので止まったらキリが無いわ」

「これからは気を付けなさいよ第十紫」

「えっ、さっきの私のせいなのかしら？」

「私の趣味はあれね。正邪観察ね」

「反逆行動以外にやることがないんでしょうね……」

第九紫って正邪と仲良さそうよね。私には正邪が誰か全く分からない訳なのだけど……きつといつか出会おうでしょう。厄介な敵として出てこなければうれしいわね。

「趣味って程じゃないんだけど……いろんな場所に寄っているんな人や妖怪と話したりする事は良くあるわね」

「第八紫まで行くと、そこら辺の人とも話せそうね」

「流石に知らない人とは話せないわよ……幻想郷じゃ知らない人や妖怪はほぼいないけど」

「……思ってた以上に第八紫が凄い人物だったわ」

「かつてそこまで幻想郷に入れ込む妖怪が居たかしらね……」

第八紫は本当になんでそんなに誰とでも仲がよいのかしらね？普通に暮らしてたんじゃないわよ。本人は成り行きで……ってずっと言ってるけど絶対他に理由が絶対あるわよあれは。

「まあ、私の趣味は第七紫と同じで幻想郷観察なのだけどね」

「ゆかりんの世界って平和だしなんか面白そうな感じがするわね」

「面白いかどうかはともかく見てて微笑ましいわよ」

「……そんな幻想郷を目指してたのだけどね」

誰か第九紫を助けてあげなさいよ……私は嫌だけど。て言うか、あまり他の幻想郷に関わりたくないだけの話なのよね。他はなんか世界がぶつとんでるところが多くて、平和そうでもどこかぶつとんでるんじゃないかと疑ってしまうわ。

「私の趣味はね「黙れよ、第一紫」……あら、酷い」

「あなたの世界の方が十分酷いわ」

「ただの平和な世界なのにね……」

「そんなのあなたの世界じゃ当たり前でしょう？ 私たちの世界はあなたの世界と造りが違うのよ」

「うわーん、みんながいじめてくるわー」

うわあ……凄いい棒読みね。まあ、真剣にそんなセリフを第一紫が言うわけないんだけど。喧嘩、終わらないかしらね。多分、終わりまで続くのだけど。

## 八雲紫会議 その7

「では、今日も会議を始めるわよ。議題は……地底についてね」

地底……あの、厄介な妖怪しかいないところね。あそこに行っても、だいたいは変な鬼に絡まれるだけだし、そもそも行く理由もさとりを力を借りたい時ぐらいしか行かないのよね。そのさとりも性格難アリだから近づきたくはないのだけど、他はどうなのかしらね。

「地底……ああ、あの能力のせいで性格を拗らせた人たちが多いところね！」

「ちよ、ゆかりん!？」

絶対地底の奴らに聞かせたらぶん殴られる言葉じゃない……いや、まあ完全に間違つてるとは言いがたいし、ある程度的は得ていると思うのだけど……あんまり堂々と言えるような言葉ではないわよね。

「……地底について話し合うとしてもあまり地底には行かなくないかしら?」

「そんなことは無いわよ?よく、遊びに行くわ」

「正直言うと、あまり第八紫の世界は参考にならないわね」

「そんなことは無いでしょうに……ただ、私は知り合った相手に恩を売って名前を覚えて、仲良くしてるだけよ?」

「それが異常なのよ。人里の人間全員の名前を覚えてるの絶対あなただけよ」

ええ……第八紫、第一紫とは違う方面でヤバいわね。て言うか、なんでそんな異常なことを普通みたいに見えるのかしらね……。

「地底は最近全く行ってないわね……一番最初に霊夢に支配されたところだし」

「……改めて第九世界の霊夢が恐ろしく強い存在だと思ひ知らされたわね」

「そうなのよね……助けてくれないかしら?」

「絶対にいやよ」

……他世界への干渉を拒否するとうか、触らぬ神に祟りなしって感じよね。まあ、私も第九紫から頼まれたら絶対断るけど。

「地て……いい？」

「第十紫のところにはないのかしら？」

「なんか文献で読んだような気はするのだけど……多分場所は知らないわね」

「そうなの？ 厄介な妖怪ばかりいるから、一度は行ってどんなやつらか把握しておいた方が良いわよ？」

「だいたいは酒を飲んでる酔っぱらった鬼達なのだけどね。下手に力を持った酔っぱらいだから厄介なのだけど。」

「地底なんて恐れるに足らずよ……霊夢にかかればすぐに金儲けの場所に変わるわ」

「第三紫の霊夢、金儲けに対して活発的過ぎないかしら」

「幻想郷一の金持ちだもの……この前は金儲けの仕方講座みたいなのをやってたわね。金をとって」

「なんとなく聞いてみたい気がするわ、それ」

金儲けね……そんなにお金には困ってないから重要視するほどではないわね。確かに幻想郷一で稼いでる霊夢の話は聞いてみたい気もするけど……絶対お金を取られるわよね。

「地底は結構強い騎手が多いわよ。あまり大会には出てくることはないけど、腕が衰えているようには見えないから、多分地底は地底で大会を開いてるんじゃないかしら」

「地底も馬を使って移動してるのね……」

「確か月も馬が移動手段だったわよ」

「根っこから違うって分かっているけど違和感がでくるわね……」

ある程度似ている世界だから出てくる違和感よね……全部違ったらそれは普通な違う世界なんだなあですむけど、人物が一緒だから根っこから変わるのがおかしく感じてしまうのよね……いまだに慣れないわ……。

「地底は厄介なところよ。よく、地上に攻めてくるもの」

「第六紫が珍しく発言したと思ってたら、とんでもない恐ろしい事を口走ったのだけど……」

「血が騒いでるのかどうかは分からないけど、1ヶ月に一回は確実に



攻めてくるわね。私一人で抑えるの大変なのよ?」

「……地底から出てくる妖怪ってどんなのが多いのかしら?」

「ほとんどは鬼よ。あとはまばらまばらに能力が厄介なだけの妖怪達かしらね」

「……多分、攻めるって言うくらいだから百人以上鬼はいると見ていいわよね……それを一人だけで制圧するってどういうことなの?他にも妖怪が攻めこんでるみたいなのに……本当にどういうことなの?」

「最近、神社に温泉が沸いたと思ったら悪霊が出てきて出てきて……その原因が地底にあったのよね。地底は会うだけでもアウトな妖怪が多いから霊夢が心配だったのだけど……出会い頭にぶつとばしていくのを見て、そう言えば妖怪になってた事を思い出したわ」

「……いや、まあ霊夢ってことは元から強かったんでしようしそれが妖怪化したわけだから確実に強いのは分かるのだけど、そんな地底の妖怪をぶつとばしていく程に強くなるものなの?」

「なってるものは仕方ないでしょう?」

突っ込みたい……そもそもなんで博麗巫女を妖怪なんかにしてるのよと突っ込みたい……。

「殺伐したところが多いわねえ……まあ、私のところは地底とも仲良くやってるのたけど」

「貴女が馬鹿にならない限り、貴女の世界で争いが起きる訳無いでしょうに」

「いやいや、私の気分だけで世界が救われる訳無いでしょう?」

「普通ならそうでしょうね。普通なら」

「……? 私は普通よ?」

「どの口が言ってるのよ! どの口が!」

またケンカが……とは言ってもこのケンカも慣れてると言えば慣れているのよね。本当にヤバいと思ってたのは最初辺りの紫会議だし……そもそも最初辺りはこのケンカもなかったのよね。第一紫の秘密を誰も知ってなかったから。

全員が知ってしまった今はもう、ケンカだらけな訳だけど……ま

あ、第一紫が自分達と同じ八雲紫と思いたくないものね。仕方ないわ。

自分と同じ姿をした人物同士がケンカするのを見ながら、そう思った。

「さて……八雲紫会議を始めさせてもらうわ。今日の議題は人里よ。」

人里……たまにつけあがった妖怪が利用しようと企むところよねえ……まあ、基本的にだいたいは人里を舐めているやつらがそんな事を考えるから、余裕で人里の優秀な人材に泡を吹かせられるのが大半なのよね。

知能がない妖怪は人を求めて人里をたまに襲いに行き、逆にちよつとだけ知性がある妖怪は人里を利用しようとする。そして普通に知性がある妖怪は人里と接しないか、友好的に接するのどちらか。

一番争いで無くなりそうな場所に見えて、一番安全と言える場所なのよね。妖怪は人間の畏れから存在してるから当たり前と言えば当たり前なのだけど。

「人里は良いところよ。よく、魚とか肉とかおまけしてくれるもの」

「第八紫のその交流力を見習いたいわね……完全に真似しようとは思わないし、できないのだけど」

「恩は誰が相手であろうと売っておくべきよ。もしかしたら、いざというところで使えるもの」

「その理論があるから人里の子供にも恩を売れるのね……」

人里の子供にも恩を売るのは流石に見境無さすぎじゃないかしらね？交流とかならまだありそうなものなのだけれど……子供に恩というのは……ねえ。

「案外、子供は昔の事を覚えているものなのよ？たかが一回だけじゃあ記憶に残らないかもだけど、私みたいに何度も交流しておけば覚えて貰えるでしょうね。だから人には子供の頃に恩を売っておくものなのよ」

「そもそも普通はそんな出会い頭に恩は売らないものなのだけど

……」

……もしかしてどこの八雲紫もどこかが狂ってたりするのかしらね。こんなに世界があるのだからどれが常識かどうかなんて分からないのだけどね。

「人里は子供への教育に良いものよ。馬を選べて、難しくても寺子屋の先生が教えるし……ああいうところが人間の強いところなのでしようね」

「一つに纏まれるというのは一つの強みよね」

「そうよね……天狗たちも人里の人間を見習って欲しいものだわ。やっぱり一人一人の個性が下手に優れているせいであんな性格になるのでしょうかね」

「上の存在に成る程さらにめんどくさい性格なのよね……逆に下つ端の方は素直で可愛い性格が多いのわね」

天狗はねえ……嫌な性格してるわよね。自分より弱い相手にはイきる癖に自分より強い存在には、頭を下げるのなもの。頭を下げて忠誠を誓った訳じゃないというのがさらに嫌な性格だと思わせてくるわね。

「人里と言えば美味しいスイーツよね。饅頭に団子に……時には外から本が手に入って、情報を得て新しいスイーツができるのも素晴らしいわ」

「確かに、食に精通してる場所でもあるわね。向上心が高いとかいうかしら。美味しいのを食べたなら、さらに美味しいのを作りたいという気持ちがあるのでしようね」

「それを思うのは店の店員という人里の人間の一部分とはいえ、店同士だからこそ対抗心とかも出るのでしょうかね」

美味しい食べ物ってほとんどは人間が作ったものものね……人間に負けてたまるかと頑張ってる妖怪も探したら見つかるかもしれないわね。もしかしたらの話だけど。

「人里……ああ、霊夢のカモがたくさんいるところね」

「そのカモって金儲けの犠牲者ってことよね？」

「その通りなのだけど……霊夢がいたらこう言うのでしょうかね。『向こ

うも満足してるのだから問題ないわよ』って」

「悪役が言いそうなセリフよね、それ」

なんか第三紫のところの霊夢って金儲けに命をかけてそうよね。お金が十分あるのに、金儲けをし続ける理由は全く分からないけど。

「人里？あの霊夢と交渉して、霊夢の下についての裏切り者共がいる場所のことでしょう！」

「そもそも貴女の味方ではなかっただけじゃあないかしら？」

「止めて！私に現実を見せないで！」

そういいながら耳を塞ぎまるまる第九紫。可哀想だとは思うけど……同時に哀れと思ってしまうわね。もう第九紫も霊夢の下についての方がいいんじゃないかしら。

「人里は幻想郷を構成している要素の一つだし……まあ、どこも平和よね。」

「そうよねえ……私のところも平和な訳だし」

「何勝手に会話に入ってきて来てるのよ、第一紫」

「いいじゃない、別に。ここは八雲紫会議する場所よ？私にも会議する義務があるわ」

「そもそも貴女が本当に八雲紫なのかは怪しいところなのだけどね」

……本当に息をするかのようにケンカが始まるわね。片方はズバズバ言つて、片方は適当にあしらう。このケンカ構成が更なるケンカを生む理由なんじゃあないかしらね。

というか、だいたいケンカをするのは第一紫となのよね。まあ、第一紫が気持ち悪いから仕方ないのだけど。嫌いじゃないけど近づいて来てほしくないわ。

聞こえてくるケンカの声を適当に流しながらそう思った。

## 八雲紫会議 その8

「さて、今日も会議を始めようかしら……議題は学校ね」

「幻想郷に学校はないでしょう?」

「……終了!」

「いや、ちよつと待ちなさい。会議を終わらせるのが早すぎるわ」

なんなのかしらね、この八雲紫たちのコンビネーション……全員同じ人物だからとかがあるのかしら? いや、今はそんなことを考えるより会議の流れを元に戻すのが先だけど。

「でも、幻想郷に学校なんてないことにはかわりないわよ?」

「でも、学校はなくても寺子屋はあるわよね?」

「私の世界には寺子屋も無いわね。勉強は親から学べばいいのだから、あんなの無駄よ」

……第十一紫の世界の人たちって全員賢いのに学校とかの集団教育する場所はないのね。親が仕事や家事をしながら勉強を教えるのはかなり大変だと思うのだけど……第十一世界は科学がかなり発展してるからなんとかできるやつがあるのかもしれないわね。

「じゃあ、第十一紫は参加しなくていいわよ」

「……えっ?」

「じゃあ、会議を始めましょうか」

「だつ、第六紫さん……?」

「皆さんは、寺子屋についてどうお思いですか?」

「あつ、あの……」

……第十一紫、今回は会議に参加できないんじゃないかしら。第六紫って不必要なやつは普通に切り捨てるし、仲間でもお荷物にしかないって判断したら殺すまであるし……そんなに第六世界については知らないけど多分、殺伐してるんじゃないかしら。

「寺子屋ねえ……最近建ったばかりだから特に言うことはないわ」

「えっ? 昔からあるわよね?」

「すみません、私も参加してよろしいでしょうか……?」

「そちらではそうなの? こっちはこの前の紅霧異変あたりに来たわ

よ？」

「……やっぱり会議に入れず無視されてるわね、第十一紫。やはり、凄いコンビネーションがここにはあるわ。それが無駄なことに使われてるのだけどね……って紅霧異変あたりにできた？」

「……紅霧異変ってかなり前よね？一番最初の異変だからかなり前なのだと思うのだけど」

「これまで何度も異変が起きたわけだけどだいたい何度も連続で起こってたわけじゃないし、一年間異変が起きない年とかもあつたわけだから少なくとも七年前……よね？まあ、七年は私たちからしたらそれなりに短いわけだけど。」

「そうなの？こつちで紅霧異変が起きたの一年前よ？」

「……ん？そちらの世界で最後に起こつた異変はなんなのかしら？」

「おーい、八雲紫の皆様ー？」

「四季が同時に各地で発生するやつだったわね」

「……もしかして、そちらの世界って結構な頻度で異変が起こってるの？」

「1ヶ月に一回ぐらいは起こってるわね」

「……かなりの頻度で起こってるわね。その世界の霊夢が過労で倒れないかが心配だわ。異変解決をするのは主に人間であつて巫女ではないとしても、大抵異変解決に動くのは巫女な訳だし。」

「異変ってそんな祭りみたいなものだったかしら」

「解決したら宴会が起きるんだし、祭りのようなものよ」

「それが案外間違いと言えないのがね……」

「異変を起こした黒幕も、終わりの宴会で幻想郷に馴染んだりしたりするのよねえ……知らなかった者同士が仲良くなれるようになる幻想郷らしいルールとは思わね。酒が入れば、遠慮は消える……それが良いか悪いかはケースバイケースでしょうけど。」

「それより、さっきの会話に第十一紫が居なかったのだけど大丈夫なのかしら……周りと一緒に無視してる私が思うことでもないかもしれないけど。ちよつと、チラツとだけ見てみようかしら……ほんのちよつとなら何も言われないでしょうし。」

そう思いこつそり、第十一紫の方を見る。第十一紫は顔を第六紫の胸にうずめて泣いていた。そして第六紫はその泣いている第十一紫の頭を撫でている……えっ？

まあ、第十一紫が泣いているのは分かるわ。一番メンタル弱いし。けど、なんで第六紫に泣きついてるの……？そいつ一応、第十一紫が無視される元凶だと思っただけ……あつ、第一紫が近づいてる。

声が聞こえなくても分かるぐらい第十一紫をおちよくり始めたわね……案の定第六紫に殴られてボコボコにされてるし……いつも通りの光景よね。

「だいぶ前に狐の子供がいるって騒いでたわね」

「へえ、そつちじゃあ妖怪は寺子屋で学ばないのね。こつちは人里の外に寺子屋があるから妖怪も学んでいるのよね」

「人間の子供は大丈夫なの？」

「時間は昼間と夜で別けてるから妖怪が人間を襲うなんてことはさせないわ」

そんなことを見ている間に、当然会議は進んでいて私が入れそうには見えない。まあ、普段から積極的に会議に参加してる訳じゃないし別に問題はないわね。ストレス発散にもなるし、第一紫がボコボコにされてるところでも見ておきましょう。

そうして、目線を第六紫と第十一紫にボコボコにされている第一紫に戻した。私も混ざろうかしらなんて思いながら。

「さて、今日も会議を始めましょうか。議題は霧雨魔理沙ね」

魔理沙……霊夢の親友ってイメージがかなり強いわね。そう言うと、付属品みたいで本人は絶対に嫌がるでしょうけど、あまり会話することもないからそのイメージが離れる様子はないわね。

「魔理沙はこつちの世界では天才なのよね。それに慢心してるところが残念なのだけ」

「まさちゃんは努力家よ。越えられないと分かってる壁を越えようと努力してるところがまさちゃんのいいところだよ」

「正直、黒歴史と言われても仕方ない生き方してるわよ彼女」

「普通に努力家ね。父の仕事を手伝いながらよくやっているとわは思うわ」

結構、周りの紫たちは魔理沙と仲が良いみたいね……宴会とかでしか見かけないし、そこぐらいしか会話もしないしで関わりもないけど、異変解決にも貢献してるのだし普通に話しかけに行ってもよいかもしれないわね。

「魔理沙は結構、科学の発展に貢献してるから幻想郷には欠かせない存在よ」

「魔法使いなのに科学に貢献しているの？」

「魔法の本来の意図は未知の解明よ。そしてそれは、科学も同じってことね」

「へー、よくわからないけど凄いわね」

ゆかりん……本当に何かを考える癖がないんでしょうね。平和ボケってやつかしら。まあ、そんなところがゆかりんの良いところで、癒されるのだから問題は全くないのだけど。

「魔理沙って誰とでも話せるコミユ力的なアレがあるから結構、誰とでも仲良いイメージがあるわね」

「何かに集中する癖があるから、魔法を研究し始めるとしばらく顔を見なくなるのよね」

「でも、その研究が終わると結果を見せびらかしにみんなに会いに行きまくるイメージもあるわ」

「分かる」

……あれ？もしかして、私この議題についていけないじゃあ……と言うかもしかかしくなくても魔理沙とそんなに関わってないの私だけみたいね。なんか本格的に会話に行った方が良さげな気がしてきたわ。

「魔理沙と言えば、霊夢たちとよく異変解決に行ってるわよね」

「霊夢を助けてくれてるのは素直にありがたいわね、話しても案外楽



しいし……かなり警戒されるけど」

「八雲紫あるあるね。そんなに深い意味ないのに警戒されるの」  
「分かる」

そのあるあるは確かにあるわね……あの店主とか私が店に行くたびに何かを疑われてるような気がするもの……霊夢のところ遊びに行ったら、「何のよう？」から会話が始まるのは当然になってしまってるもの。

「八雲紫ってどんなイメージって聞くと、胡散臭いが一番高くなってしまうものねえ……なぜかしら」

「分かる」

「誰よ、さつきから分かるbot化してる八雲紫は？」

「私よ」

「貴女だっ——」

「それ前やったからやらなくていいわよ」

ノリが良すぎる……そりゃあよく議題から話が脱線して、会議してない風に見える訳よ。実際にしてない方が多いけど。

「話を戻すわよ……他に魔理沙で話せることってあるかしら」

「魔理沙が香霖堂の店主に遠回しに告白して、気づかれずに泣きながら店を出ていった話ならあるわね」

「そういうのはやめなさい。まだ、引きずってるでしょうから」

「金髪の子かわいそう」

恋愛話は……まあ、振られてるわけじゃあないから笑い話と言えば笑い話なのだけど……今のところ黒歴史でしかないでしょうし、やめといった方が良いとは思わね。

「魔理沙は努力家の見本みたいなのがいいわよねえ」

「黙れ、第一紫。あんたは見本なんかになれないでしょう？」

「あら、私は魔理沙の話をするのだけど」

「魔理沙について話してるのは私たち、あなたは違うでしょう？」

「……？なんで私がはぶられているのかが分からないわね」

「ごっちは、なんではぶられないと思ってるのかが分からないわ」

また、第一紫との喧嘩が始まってる……本当に第一紫って嫌われて

るわね。私も嫌いなのは変わらないのだけど……関わりたくない気持ちの方が強いから、あんな風にけしかけてはいけないのよね。

「うーん……考えても分からないわ」

「そもそも、第一紫は根本的どころが違うのだから入ってこないで欲しいわ」

「えー、幻想郷自体はほぼ一緒でしょう？」

「息を吐くように嘘をつくのはやめて欲しいわね」

「なら、一旦私の幻想郷に来てみる？もてなすわよ？」

「……あそこには二度と行かないって決めてるわ」

「あら、残念」

第一紫って実力はヤバいし、メンタルもヤバいし、性格もヤバいしのヤバいの三点セットだから言い合いだと確実に勝てないのよねえ……常識を知らない人に常識で殴りに行っても全くきかないのと一緒みたいなものだし。

第一紫ほど、触らぬ神に祟りなしが似合う存在はいないと思うわ……問題なのは向こうからこちらにやって来るところだけ。この十一人の八雲紫が揃って会議ができているのも第一紫のおかげだし……まあ、それで第一紫の気持ち悪さが消える訳じゃないのだけど。

「うちの魔理沙もそちらの魔理沙も変わらないでしょう？」

「変わり過ぎてるのだけど？」

「……？」

まだまだ喧嘩は続いているみたいだし……この喧嘩をBGM代わりにゆつくりと休むのも悪くないわね。そう思いながら、私は目を閉じた。

## 八雲紫会議 その9

今日の会議が終わり、それぞれの八雲紫が帰る中、私はまだ残っていた。と言ってもたいした理由じゃないのよね。この会議室が居心地よいつてだけなもの。上質な机に座り心地の良い椅子。

会議中は第一紫との喧嘩で騒がしかったというのに、今はそのことを忘れさせるほど静か……なんというかこう、冬のこたつぐらいに居座りたくなる魔力があるわね。みかんとかあれば完璧なんじゃないかしら。

会議室にはお菓子もお茶などの飲み物がないのが悔やまれるわね……まあ、それぐらいこうやってスキマで持ってくればよいだけなのだけど……うん、居心地の良い空間に居座るというのはとても良いものね。

さてと……どれぐらい居座ろうかしら。お菓子と飲み物を用意しておいてあれなのだけどずっとここに居るわけにはいかないのよね。することが少ないとはいえ、自分の幻想郷の管理もあるわけなもの。私自身はもっと休みたいのに現実がそれを許してはくれない……あれ？これって案外いつものことよね？じゃあ、私は社畜だったりするのかしら……考えたくはないわね。

少しそんな暗い考えから目を逸らそうと周りを見たところ……もう一人八雲紫がこの会議室に残っていることに気づいた。確かあの席は……第九紫だったかしら。確か、第九紫の幻想郷は霊夢に支配されているという話だったし、それが嫌になってまだ残っているのかしら？

でも、いつもならもう帰ってる筈だものね……それにただ居座ってるんじゃないかって何か考え事をしているようにも見えるし、いったい何をしているのか気になるわね……まあ、聞けば分かるでしょう。

そう考えると私はお菓子と飲み物をスキマに片付け、第九紫へと近づいた。

「珍しいわね、まだ残っているなんて」

そう言うのと、突然後ろから話しかけられたことに驚いたのか第九紫

が少し跳ね上がる。しかし、こちらを見て話しかけたのが私だと分かり安心したのか、安堵した表情だった。

「第七紫、話しかけるのはいいけどあまり驚かせないようにしてほしいわね」

「ごめんなさいね、驚かせるつもりはなかったのよ」

「全く……それで何か用かしら？」

「別に用という程でも無いわ。ただ、いつもは帰っている時間なのにまだ残っていることを不思議に思っただけよ」

「ああ、なんだそう言うこと」

そう言うのと第九紫はまた何かを考え始めたかのか頭を抱え始めた……えっと、質問に答えてほしいのだけど、これは答えてくれずに時間だけ経っていくパターンかしら？とりあえず、圧でもかけようと隣に座った瞬間、第九紫は口を開いた。

「ねえ、第七紫。宇佐見董子って名前に何か聞き覚えはないかしら」

逆に質問されたことに少し戸惑ったが、すぐにその質問について考えることにした。宇佐見董子という名前に聞き覚えがあるかないか……うん、無いわね。でも、名前の感じからして外の世界の人物かしら。けど、なんで第九紫はその人物を私に質問したのが謎よね……とりあえず、普通に聞いたことないと答えておきましょう。

「聞いたこと無いわね」

「そう。まあ、世界が違うとそういうこともあるわよね。特に私の幻想郷とか」

私はその発言に対して無言でいると第九紫が、今の笑うところよ？と付け足してくる。ただ、第九紫は普通に可哀想だと思うから笑えないのよねえ……助けようとは思わないけど。けれど、その宇佐見董子という名前は第九紫にどう関係があるのかが分からないわね。非常に気になるわ。

「その宇佐見董子という人物と会ったのよ」

「……それだけ？」

「ええ、それだけよ」

……本当に宇佐見董子って誰なのよ。最近会議でも、私の知らない

人物の名前が上がるのがよくあるし、もしかして私の幻想郷だけ時間が遅れているなんてことはないわよね？それより、最初の私の質問に答えてもらってないような気がするのだけど……そんな私の気持ち察したのか第九紫がまた口を開いた。

「それで昔を思い出していたの」

「昔？」

「ええ、昔よ。二人で日本中を旅していたの」

「そう……そのもう一人が宇佐見童子なのね」

「いや、違うわ」

「えっ？」

私は第九紫の言っていることが良くわからなかった。宇佐見童子という人物と旅をしていなかったというのならどうして昔を思い出しているのかしら。それも悩むような思いだしかたを……。

「宇佐見童子はその旅に関係あるといえばあるのだけど、まあほぼないようなものよ」

「……良く分からないわね。どういうことなのかしら」

「分からないのは当然よ、貴女は私じゃないでしょうし……少し長居し過ぎたわね。私もそろそろ帰ることにするわ」

そう言い、第九紫は立ち上がる。少しだけ私から離れたあと、それじゃあ、また次の会議でと言い残しスキマの先へと消えていった。私は第九紫の言っていたことをパズルのように組み合わせようとするが上手くはいきそうにない……恐らくピースが足りないのかもしれない。

私は第九紫ではない……それだけは間違いない事実だった。

「それでは今日も会議を始めましょう。今日の議題は八雲紫よ」

八雲紫……私たちのことね。そんなことを議題にしてもあまり意味ないと思うのだけど、周りの八雲紫たちはいったいどう思っているのかしら。

「八雲紫……えっ？それが議題なの？」

「ええ、そうよ。存分に話し合ってちょうだい」

「……流石に難しいわね」

「私たちが話し合えることってあるのかしら」

どうやら、会議も難航しているようで少し安心する。急に自分たちのことで話せて言われてもそりやあ困惑するわよね……それでもなんとか話題を作ってなんとかしないとは思うのだけどどうなるのかしら。

「この前、結界の強度を高めたとかどうかしら？」

「それはどちらかという幻想郷の話題だと思うわ」

「人里でパーティーを開いたとかの話題はあるわね」

「第八紫が開いたパーティーだし……ギリギリセーフよね？」

なににせよ難航すること自体には代わりないようね。まあ、私も自分の話題をしゃべりなさいなんて言われても困惑するだけでしようし……確か、最近あったのは霊夢に修行をつけたとかがあるわね。なかなか修行しないから、お金で釣るしかないのが残念なところなのだけど。

で、他は……霧雨魔理沙と会話をしてみたことかしらね。最初から最後まで怪しまれ続けたまま日常の会話をする謎の状況になってしまったのよね……やっぱり最近の年頃の子供というのは扱いが難しいわ。

「そういうえば最近ダイエットを始めたのよね」

「ダイエット……効果はあるの？」

「ないわね」

「ええ……」

「まあ、始めた理由が運動をしたかったからぐらいの理由だったから別にいいのよ」

ダイエット……そもそも妖怪って太るのかしらね。確かに人間と同じようにご飯を食べているとはいえ、妖怪と人間は色々違うわけだもの。私だって太ったという記憶はな……そもそも体重計が家になかったわ。もしかしたら計ってみたら案外太っていたりするの

しら……考えたくないけれど、否定はできないわね。

「こうして振り返ってみると時間は余ってるのにあまり何かをやるうとしてないのよね」

「まあ、時間があっても気力がないことがほとんどなわけだもの。仕方ないわ」

「やりたいことがあってもだんだんめんどくさくなって後回しにしてしまうものね……最近のことを思い出してもやらなきゃいけないことをやっている姿しか想像できないことからそのことを伺えるわ」

あー……分かる意見ね。気力がなくなるとやらなきゃいけないことと習慣になっていくことしかできないもの。その気力が削られる原因がそのやらなきゃいけないことなのだから、無限ループになるわよね……。

「時間があるのに休んでないのも問題よ」

「結局は気を張らないといけないものね、管理人として」

「そうそう、ゆったりできる時間が無すぎなのよ。これじゃあ気力も回復しないわ」

これも分かる意見……って流石に分かる意見多すぎないかしら。同じ八雲紫の意見なのだから当然と言えば当然なのだけど。

「どの八雲紫も退屈そうなことしかしてないわね。私の楽しい生活を教えてあげましょうか?」

「別に要らないわよ、あなたの生活情報なんて」

「あら、手厳しい」

「私は事実を言ってるだけよ?」

「でも、第一紫っていつでも楽しそうだから気になりはするわね」

「ゆかりん? 考え直しなさい」

「じゃあ、まず一つ目は——」

「だからしゃべらないでくれる?」

ああ、どんな議題でも結局はこうなるのね。せっかくだし今回は私も参戦してみようかしら。なんとなくそう思った。

## それぞれの幻想郷

### 第二の幻想郷

空を覆う赤紅い霧……それにより日光は遮られ幻想郷は紅く染まっていた。霧を力でどかさうにも霧には毒が少し含まれており吸い込んでしまえば具合が悪くなる。もちろん、それは馬も同じ話であり、実際に具合が悪くなった馬も馬病院に続出している。

今は人里の守護者により結界が張られ、人里は大丈夫になっているが根本的解決に至った訳ではない。人里の外は危険なままなのだから人里の外に出ることは出来ない。さらに、太陽の日が地上に届かなくなっているので馬の食料も食べ物も作る事は出来ない。

ここままで大きな問題を抱えているというのに人里からは何も出来る事はない。当然だ、移動するには馬がいる。だが、その馬は霧により結界から出られない。その結界を張れる人里の守護者は人里に結界を張り続けなければならない。

要は、人里は詰んでいるのだ。将棋で言う、どこに王を動かしても次の一手で相手に王をとられてしまう状況のように、王手なんて生易しい物ではなく、詰みという圧倒的宣言が……だがなんとかする方法はある。人里からしたら詰みだ。なら、人里以外からなら？もうすでに戦いは始まっていた。

「ああ、異変解決とは言え結界張りながら移動するのは堪えるわね」「仕方ないぜ。そうでもしないと私たちはともかく馬がやられてしまうからな。どうせ、目的地は分かっているんだ。さっさと異変解決しようぜ」

「まあ、そうね。さっさと終わらせて、コイツに餌でも食わせてあげましょうか」

博麗の巫女……それは妖怪、人間、どちらの立場でもなく中立の立



場を制する存在である。そして巫女にはとある仕事が課せられているのだ。

異変解決……それが巫女である博麗霊夢に課せられた仕事であり、成し遂げなければならぬ事である。幻想郷に起きた異変と呼べる物を片っ端から解決するのだ。ただし、異変解決には障害がつきまとう……例えば

「おつ、おい霊夢！急に暗くなったぞ！」

……このように。もちろん、急に暗くなったのは気づけば夜になっただなんてゆかりんのように気が抜けて起きた笑い話ではない。暗くしている人物がいるのだ。

「霊夢！聞いているのかれいっ！危ない！」

魔理沙は何かが飛んで来ているのを察知し、馬を操りそこから逃げる。そしてその瞬間魔理沙の後ろから爆発音が鳴り響いた。

「ちっ！敵かよ……おい暗闇からの攻撃とか恥ずかしく無いのかっ！」

だが、虚しく魔理沙に帰ってくる声はなく帰って来たのは妖力が込められた弾幕でありまたそれを避ける。

（くっ……相手が誰だかは分からんが……こつちが見えてるらしいな。弾幕を撃ってくる方向が変わってるから相手は移動しているみたいだし……弾幕を撃たれた後撃ち返しても意味はないな。今は全部回避してるから問題は無いけどこのままじゃ攻撃を受け続けるだけだ……霊夢からの反応もないし、私になんとかするしか無いのか？）

まだ、辺り一面は真つ暗のままであり一寸先すら見えない状況だ。何者かが真つ暗にした……その事実が分かっても相手が見えなければどうしようもない。つまり相手を目以外で見る方法がなければどうしようもないのだ。

（……そういえば相手はどうやってこちらを見ているんだ？一番高いのは能力でって話だが……暗くしているのが能力なら自分も見えない可能性はあるにはある。なら……相手はどうやって私を見ているんだ？……って考えている場合じゃ……あれ？攻撃が来ない？）

普通、相手はこちらを狙ってきているのなら真っ暗でも相手はこちらが見えていると考えるのは普通だ。そしてそれが分かっているなら、止まって考えるのは隙を見せすぎているとしか言えないだろう。普通なら。

(なんで攻撃を飛ばしてこないんだ？こちらが分かっているなら攻撃するのが普通な筈……まさかこちらが見えていない？ならどうやって私を狙って……音か！)

突然真っ暗になったとき、ずっと声を出さずに居れる者などほぼいない。だからこそ相手は魔理沙を狙え、魔理沙は見られていると思っ  
てしまうからこそ逃げ続けてしまい音を出す。普通ならそのループにはまってしまう。魔理沙が思わず考え込んで止まってしまったからこそその奇跡。

(恐らく、相手は弾幕による爆音が起こった時に逃げていたんだろう。だが、逆にそれは弾幕が着弾した後はこちらの足音も聞こえなかったってことだ。なら、今は相手も動いていない！)

魔理沙にもたらされた奇跡は魔理沙にチャンスを与えていた。相手も動いていないという事実は今、相手の場所が分かれば攻撃出来るということだ。まさに、攻撃され続けた魔理沙の大逆転チャンスだと言えるだろう。

(だがどうやって相手の居場所を判断する？音を出す方法なら、失敗すればまた狙われる！匂いなんて匂わないし……本当にどうする？このままだと、馬がお腹をすかせてうごいちゃう！)

だが、もたらされたチャンスは同時にピンチでもあった。失敗すれば許されないチャンス……魔理沙はチャンスがありながら大ピンチの状態でもあったのだ。

だが、しかし思い出して欲しい。この場所に相手と魔理沙以外にももう一人居ることを。真っ暗になってから一度も声を出していない人物の事を。そして、その人物は魔理沙が動かず相手も動かない状況を待っていたということ。

「うっああああああああ！」

「へあっ!!」

その瞬間、真っ暗だった辺りがさつきまでの紅い霧に覆い隠された景色へと変わる。少し変わってるのは、さつきまで居なかった筈の金髪の少女に見える存在とその近くでその存在を心配しているポニーだった。

ポニーとは肩までの高さが147cm以下の馬の事であり、ポニーという馬の種類が居るわけではない。そして、そのポニーごと見下ろす霊夢……その手には陰陽玉が握られていた。

「魔理沙……あんた慌てすぎよ」

「仕方ないだろ……いきなり暗くなつて叫ばずにいられるか？私には無理だぜ」

「はあ……あそこに湖があるから少し休憩しましょう、魔理沙はさつきまで馬を動かさすぎたでしょ？」

「そうだな。そろそろ休憩するか」

二人は湖に向かい、そしてたどり着くと馬から降りて馬に水を飲ませ始めた。

「で、どこに行けばいいんだっけ？」

「おいおい、霊夢。もう見えてるだろ？あの紅い館だよ」

「ああ、あそこね。すぐ目の前だし、馬も水を飲んだしさつきと行きましようか」

「そうだな、異変解決は速い方がいいからな」

二人は馬に乗り、館へ向かって走り出す。前に進んでは、前に進み。前に進んでは、前に進み……だが、館にたどり着く事はなかった。まるで道に迷ってるかのように館にはたどり着けなかったのだ。

「ねえ……魔理沙。これ道に迷ってない？」

「多分そうだろうな……暫く歩いたら木に目印をつけるようにするか」

「そうね」

また二人は館に向かって歩き出す。今度は暫く歩いたら木に目印をつけるようにしているが……またもや二人が館にたどり着く事は無かった。それどころか目印によって衝撃の事実気づく。

「……この木、既に目印がつけられてるな」

「それだけじゃあ無いわね。辺り一面の木に目印だらけよ」

そう、その二人の周りの木全てに魔理沙がつけた目印がある。これはゆかりんのように適当に歩いてたら帰れなくなつて能力の事もすっかり忘れ、道をひたすら歩いたあげく泣き出した黒歴史なんて話ではない。誰かが、自分達を道に迷わせている……そう考えるのが普通だ。

「道に迷うのは妖精のせいなのよ」

館にたどり着けない二人の前に現れたのは一人の妖精。乗っている馬は先ほどと同じくポニーのようだ。

「貴女達を氷づけにしてあげるわ!」

そして妖精から二人に向かって空気中に作られたつららのような物を発射していく。だが、その攻撃は意味無いとでも言いたいのか二人は何も喋らずに避けていく。

「さつきはやられっぱなしで何もできなかったからな。今回は私がやってやるぜ! マスタースパークツ!」

魔理沙から放たれた太い光のレーザー……単純ではあるが当たれば大ダメージだろう。だが、妖精は慌てる事なく水を凍らせて湖の上を走っていく。

確かに魔理沙のマスタースパークは確かに当たれば強い。だが、当たらなければどうという事もないのも事実だった。さらに一直線上を真っ直ぐ飛んでいくだけなので馬の機動力があれば避ける事も難しくはない。

「当たらないならこちらから近づくだけだぜ!」

だが、そんな事にめげる事なく妖精へと突っ込む……だがそれがいけなかった。凍らされた湖の中に足を踏み入れた瞬間、魔理沙の馬の足が沈んだのだ。

「なっ、沈んだ?!」

「ふっ、かかったわね! アタイの馬はポニー……それに対してあんたの馬は普通! 重さが違うからあんたが沈むのは普通なのよ!」

「へえ……じゃあ氷の上を歩かなければいいわね」

そう言った霊夢は陰陽玉を回転させ始める。そして、陰陽玉の回転

は少しずつ速くなっていき、遂には黒と白の色が混ざり灰色に見えるほどだ。そしてそれが氷に落とされると……回転している陰陽玉が増えた。

凍らされた湖の上をどんどん陰陽玉が埋め尽くしていく。その光景に妖精はさつきまでの笑顔を無くしていた……そしてその増えていく陰陽玉の上を霊夢が歩き始める。

「……その回転でそれが増えてるなら、それを止めてやれば良いのよ！アタイったら天才ね！」

そういう、妖精は陰陽玉を凍らせようとする。だが、一つも凍る気配は無い。霊夢はゆっくりと妖精の元へ向かっている。

「なっ、なんで凍らないのよ！」

「知ってる？暑い、寒いなんて感じるのは空気が熱を伝えているからなのよ……陰陽玉は回転時周りを真空状態にしているわ。つまり凍ることはない」

「……う？とにかく、凍らないなら戦略的撤退たっ!!」

「……あら、撤退しないの？」

妖精は撤退をする事は出来なくなってしまう……何故なら既に陰陽玉によって囲まれていたからだ。

「そっ、そんな……！天才のアタイが……」

「妖精は大人しく一回眠ってなさい」

霊夢なそう言った瞬間、大量の陰陽玉が妖精に襲いかかった。

「じゃあ、今度こそあの館に行くわよ」

「……おう」

彼女らはまだ進む……異変を解決するその時まで！

## 第九の幻想郷

『紫、幻想郷は私が支配することに決めたわ』

林の中を走る。ひたすら走る。スキマは使えない、使ったら霊夢に気づかれてしまうから。後ろを見れば私を追いかけると天狗が数体いる。木々という壁がなければ私はすぐに追い付かれていただろう。

『うーん……本気の霊夢とやりあうのはなあ……』

私の味方は一人もいなく、私の敵はどこにでもいる。敵ではないが味方ではない……そんな存在が何人でもいる。だから私は敵に追いかけられ、誰かに頼ろうとすれば見てみぬふりをされているのだ。

『……ごめんなさい、紫。私はあなたの味方になれないわ』

何人にも助けを求めた。だが、帰ってきたのは無理の一言。どうしようもない、その言葉だけで納得ができてしまうのが、悲しく、とてもつらかった。

『ごめんなさい紫様……』

信頼していた仲間はどこかに消え、信頼していた友もどこかに消え、誰も私を救ってくれずに、私は幻想郷を救えずに……何カ月が経ったのだろうか。涙がふと、零れ落ちる。

『もう無理です、紫様。諦めましょう……それしかありません』

それでも私は諦めなかった。諦めるわけにはいかなかった。幻想郷をもとある姿に戻さなければ、私が求めていた幻想郷を取り戻す為に……。

「はあ、はあ……なんとか、逃げきったわね……」

天狗達を振り切り、地面に座りながら少し休憩をする。下手に妖力を使って戦えないのが問題だ。大きな事を起こせば霊夢に気づかれてしまう可能性がある……本当に化け物スペックよね。どうしたら倒せるのよ、あの巫女。

私の味方してくれてると思っていたから安心してたのに、おもいきり裏切るなんて……本当に鬼畜巫女よ、鬼畜巫女。あんな巫女が幻想郷を支配しているって考えたら支配されてる側が可哀想で堪らな

いわっ！

まあ、周りからすれば可哀想なのは私の方なのだけど……あははは、気が狂いそうだわ。けど、狂ったら狂ったで完全に負けるだけなのよね……いつから現世は地獄になったの？

「どうも初めまして紫さん」

そんな事を考えていた私にそいつは急に現れ、話しかけてきた。思わず、後ろに下がる。

「……そんなに警戒しなくてもいいでしょうに」

「悪いけど、突然現れた相手を警戒しないわけにはいかないでしょう？」

怪しさ全開の人物を警戒しない人なんてどこにいるのよ。このタイミングで来るなんて完全に霊夢の手下じゃない。そんな適当な登場で私を騙せるなんて思わないことね！

「はあ……では、手短に目的を話しますよ。紫さん、力を貸してください」

「……いや、警戒してる相手に頼まれたところで手を貸すわけないでしょう？」

何を考えてるのかしらこいつ……やつぱり霊夢の手下に決まってるわ。手を貸したら連れていかれて、霊夢に捕まることに決まってるわ！はい、名推理よ！

「霊夢からこの幻想郷を取り返す……そのために力を貸してくださいませんか？」

「……！」

本気で言っているのなら味方に……いや、騙されるわけにはいかないわ！こんなやつという言葉なんか信用できるわけないもの！その皮、見事に破ってやるわ！

「本気で言ってるのかしら？あなたも霊夢の実力は分かっているでしょう？私が力を貸した程度で勝てるような人物じゃないのよ？」

とりあえず事実を並べて反応を見る。本当に事実ってところが悲しいわよね。大妖怪なのに人間に勝てないなんて……いえ、これ以上はやめておきましょう。さあ、どう返すつもりかしら？

「では、なんで紫さんは逃げ続けているんです？」

「……え？」

予想外の回答が来て思わず声が漏れてしまったわね。でも、本当に予想外だわ……。だって私を味方につけたいならそこは「そんなことありません！」とか励ましの言葉をつけるんじゃないの？ 霊夢の手下でなくともそう返答すると思うのだけど……。

「紫さんはなぜ逃げ続けているんです？」

「……私の幻想郷を取り戻すためよ。そのためには私が霊夢に下るなんてことはできないわ」

とりあえず真面目に答えておこうかしら。想定外の質問をすることによって私を混乱させる作戦でしょうけど、そうはいかないわよ……。最後に勝つのはこの八雲紫なのだから！

「あなた一人で霊夢に勝てるなんて思っていないの？」

「……確かに私一人では勝てないわよ。けど、仲間さえ揃えば——」

「誰にも助けをもらえず、自分の式神にも裏切られたのにですか？」

「うっ！」

かつ、かなり痛いところをついてきたわね……。実際私が逃げ続ける理由って『どこかに私を助けてくれる人がいるはずよ』って理由だけで逃げ続けてるし……。べっ、別に何も考えずに行動してるわけじゃないわ！

……。とりあえず、なんとか返さないといけないわよね。でも、特に思い付かないわ……。語彙力！ 私にはきつとそれが足りないわ！ これから身につけないと……。って、これからじゃ遅いじゃない！ 今、欲しいのよ！ 今！

「分かりますよ、紫さんの気持ち……。特に何も作戦なんてないのでしよう？」

「うっ！」

なっ、なんでそれを……。八雲紫という妖怪のカリスマ賢者というレッテルを貼られてるのにそのレッテルからは考えられないような事を当てるの!? こいつタダ者じゃないわ!?

「あの霊夢から確実に幻想郷を取り返したいとは強く思っている……」



けど、味方だと思っていた霊夢に対する対抗策なんて用意していなかったし、最初に手助けを求めようとしていた地底は一番最初に支配されていた……それで混乱しているところを——」

「いえ、もういいわ。随分、私の考えについて分かっているようね？」  
むしろ当たり過ぎて怖いぐらいだわ……実はこっそり見てたんじゃないかしら？もしそうだとしたら……ストーカーよ！ストーカー！警察に訴えて……そういえば幻想郷に警察はいなかったわね。似たようなのはいるけど。」

「ええ分かりますよ……私もそうでしたから」

「……？」

「私も霊夢から幻想郷を取り戻そうと行動してる一人っただけの話ですよ……まあ、仲間がいるかなんてご覧の通りですがね」

そう言いながら、そいつは手を広げ少し笑う。私にはそいつが嘘をついているようには見えなかった。ただ、悲しそうな表情をしていたのだ……霊夢の手下ではなさそうね。

「そんな時、あなたの噂を聞きました。霊夢に対抗しようと、逃げ続けるあなたの噂を……」

「……あなた名前は？」

「鬼人正邪です。なぜ名前を？」

「仲間の名前ぐらい知っておかないといけないでしょう？」

正直一人だけで逃げ続けていたらメンタル死んでたでしょうし……霊夢と戦うとしては焼け石に水でしょうけど、逃げ続ける仲間としては申し分ないでしょう。とりあえず正邪に手を伸ばす。正邪はそれを手をとり、私たちは握手を交わした。

「よろしくしますわ、正邪」

「よろしくお願ひします、紫さん」

正直、完全にこのキャラは演技だとは思うし、そもそも普通の妖怪なら霊夢には敵対しないのでこの正邪という人物はかなり怪しいわけなのだけ……まあ、敵の敵は味方よ。少なくともその敵を倒すまでは……それまで味方として扱ってあげるわ！

真つ暗の中、月の明かりだけが頼りになる夜。八雲紫は葉っぱの中に埋もれ爆睡していた。それも仕方ないだろう。これまで一ヶ月の間、一度も眠っていないかったのだ。いくら妖怪が人間より強いとはいえ、精神では人間と一緒に、いや人間以下なのだ。

一ヶ月の間、少しも眠れず、ただずつと追いかけていたとすればいくら妖怪の賢者と言えど精神は疲弊するに決まってる。そのため正邪という仲間を得た、八雲紫は監視を正邪に任せ眠ってしまった。

そのため監視を任された正邪は眠ることなく、静かに座りながらただ空を見ていた。

「……やつと、帰ってきたか」

だが、そこまでの間静かにしていた正邪がいきなり口を開く。しかし、周りには正邪と爆睡している八雲紫しかいない筈なのに正邪はまた誰かに話しかけるように口を開いた。

「周りには追っ手はいないか……それは良かった。爆睡してるこいつを起こすのは骨が折れそうだったからな」

先ほど八雲紫と話していた口調なんて無かったかのような口調で話す正邪。丁寧さんづけで呼んでいたことが嘘のようである。

「そういうえば、お前やけに八雲紫に執着してたよな？理由はあるのか？」

正邪は会話をしているようだった。誰もいない筈なのに、相手はいるはずはないのに。ただ、まるでそこに誰かがいるかのように口を開き会話をしていた。

「教えないね……まあ、いいさ。霊夢という存在にたいしてはちっぽけだが、強力な味方が得れたことには違いない」

会話の相手は昔からの付き合いのようである。ただ、勘違いして欲しくないのは、正邪は別に携帯電話などを持っているわけではない。そもそもそんな物は幻想郷にはない。あっても使えない。

「ハイハイ、お前には感謝してるって……ハイは一回？お前は私の親

かよ」

目には見えない存在が正邪には見えている。そして、正邪はそれと会話をしている。それだけが、真実。それだけがこの奇妙な空間を作りだしていた。

「とりあえず周りの監視は引き続き頼んだ。正直、こんな暗さじゃ何もわからん」

静かな空間に正邪の声が残る。だが、それによって敵がやって来たり、八雲紫が起きたりするようなことはない。

「やけに正直だと？正直に言わんとお前は行動しないだろ？」

不思議な会話は続く。恐らく、八雲紫が起きるまで続くのだろう。果たして、八雲紫が正邪を味方として率いれたのは正解だったのか。それとも不正解だったのか。

彼女らは霊夢から幻想郷を取り返せるのか。それともあっけなく敗北してしまうのか。

振った賽子の目がどれか分からないように、この二人の話の結末は分からないだろう。何しろ、この物語は始まったばかりなのだから、今結果を言ってしまうえば、それはネタバレというやつだ。

八雲紫と鬼人正邪……本来なら手を取り合う仲間になるはずが無かった二人が、奇妙なことに平和を守る博麗の巫女によって手を取り合うことになったのだ。

では、これで今回はおしまい。この物語の結末はいつかまた語られることだろう。

## 第七の幻想郷

満月が輝く夜の中、先ほどまでの宴会の騒々しさはどこにもなく、  
霊夢が一人でそのあとを片付けていた。

「はあ……なんで異変解決一番の功績者がこんな雑用しなきゃなら  
ないのよ」

多くの皿、多くの酒の空き瓶、多くの箸……確かに霊夢がじゃんけ  
んで負けたとはいえ、それらを一人で片付けるのはかなり骨が折れる  
ことは間違いなく、いくら骨があつても足りないと言つても詐称はな  
いかもしれない。

いくら時間が経つても終わりが見えることはなく、深夜までかかっ  
てしまうのではないだろうか……そんな疑問が霊夢の中で出てきて  
しまう。そうなれば、出てくる結果というのは一つだった。

「あー……適当に明日妖精とか妖怪とか連れてきてやらせたらいいで  
しょ。そうと決めれば今日はもう寝ようかしらね、一応異変解決で疲  
れてるわけだし」

霊夢の中で巫女としてどうなのかとも思つてしまう結論が出てし  
まい、問題を放棄し体を休めるといふ行動に移そうとしたとき……彼  
女は現れた。

「異変解決お疲れ様、霊夢」

どこからか現れたその少女は扇子で口元を隠し近くに腰を降ろす。  
扇子を持たないもう一つの手には徳利が一つと猪口が二つ。少女は  
徳利から二つの猪口に酒を注ぐと、一つを霊夢へと手渡した。

「お疲れ様ね……本当にそう思うならこの惨状をなんとかしてほしい  
わね」

そうは言いながらも乾杯を済ませ、一気に口に注ぎ込むと少女……  
紫の横に座る。味が気に入ったのか、酒がなくなつたからというそれ  
だけの理由なのか、自ら徳利を手に取りまた猪口に注いだ。

「そんな急いだらせつかくの味が分からなくなるわよ？」

「良いのよ、旨いか不味いかは分かるわ」

そう言いながら、その二杯目も口に注ぎ込む。既に宴会で何杯も飲

んでいるというのに関係無いようだ……猪口が小さいというのもあるかもしれないが。

「そういや、紫。あんた宴会にいなかったわね」

「私は私の用事があったもの、賢者というのは巫女と同じぐらい……いや、それ以上に大変なのよ?」

「ふーん、その『第七紫』って書いてるプレートもその用事に関係あるのかしら」

霊夢は紫の胸元についてあるプレートを指差しそう言う。いつもはつけていないプレート、そこに書かれた『第七紫』という謎の文字。気になってしまうのは当然だろう。

「うーん……そうね、霊夢。もしも私が何人もいるって言ったらどう思うかしら?」

「あんたみたいなのが何人もいたら、幻想郷の終わりよ」

「あら、酷い。とても悲しいことを言うのね」

「そんなこと思ってないのによく言葉が口から出るものだわ」

霊夢と紫の酒を飲みながら続く談笑。かなり続いているというのに不思議なことに大きいわけでもない徳利の中身はなくなる様子はなく、いまだに二つの猪口へと注がれ続ける。

注がれるのに中身がなくならないなど夢か幻か、それとも勘違いか……全てが正解ではなく、全てが間違いではない。それこそが幻想郷、人々が現実をどう受け止めるかの違いでしかない……現実という徳利から注がれた液体を、どの猪口に注ぎ込むのは一人一人の自由なのだから。

「で、何しに来たの?」

「やってることを見たら分かるでしょうに……感謝よ、異変解決のね」「感謝?いつもはやってないのに?」

「いつもやってないことはないでしょうに……まあ、今回が特別というのもあるわね」

そう言うとき紫は手に持つ扇子を霊夢へと差し出す。

「えつと……何の真似よ?」

「今回の異変はこれにすら影響があったわ。つまり、私のスキマの方

にも影響があったってことね」

「そういえばあんたの所に影響が出る異変はこれまで無かったものね」

「それだけじゃないわ。この異変を起こした鬼人正邪……彼女は今の幻想郷を潰そうと異変を起こしたのよ」

「そういうばそんなことを言ってたような気がするわね……こんな異変でできるとは思えないけど」

霊夢は目を自分の持つお払い棒に移すと、お祓い棒をくるくると回す。霊夢にとって、物が勝手に動くというのは異変解決の邪魔になるどころか助けになったのでそう思うことは仕方ないことだらう。

「彼女は幻想郷の秩序を破壊しようとした……既に賞金首にもしておいたわ。それほど今回の異変は不味いものだったのよ」

「へー」

「聞く気が無すぎないかしら……まあ、そんな異変を早めに解決してくれた霊夢に感謝してるということよ」

「……まあ、報酬をくれるならなんでもいいわよ。そろそろ貯金も切り崩さなきゃだし」

後ろを向き、自分の部屋の方向を見ながらため息をつく霊夢。これまでは、異変が起きる頻度が少ないとはいえ異変解決の収入は高収入ではあり、異変解決以外にも札を売ったり妖怪退治だったり仕事はあつたりと貯金するほどお金が集まっていた。

しかし、最近は平和になってきたのか仕事が減りその分収入も減りと貯金するほどのお金は貯まらなくなってきたのでまず収入を気にするのは当然だ。一応、巫女の立場を使い人里から助けを得られるとはいえそれは巫女としての尊厳を失う諸刃の剣でもあるのだから。

巫女という仕事、幻想郷で大事な役割を果たすため最低限の生活は必ず与えられるが、そんな最低限にすぎりたいと思う者はいない。それも一人の少女ならなおさらだろう。さらに独り暮らしでもあるのだから。

「霊夢……貴女貯金があったのね」

「退治されたのかしら？」

だが、そんなことを知らない紫にとって巫女の生活は「せつかくの高収入もすぐパーっと使って与えられてる最低限で暮らしてるんでしょうね……」としか思っておらず、貯金があったというのは衝撃の真実ではあるのだ……賢者が巫女をどう思っているんだという話にはなるが。

「酒が回ってるのかしら、怒ると酒の味が分からなくなるわよ？」

「煽られると当然怒るでしょ……酒はあんたを退治してこの怒りを収めてからね」

「あら、怖い。怖いからそろそろ終わりとしましょうかね」

「あつ、待ちなさい！」

お祓い棒を持ち、紫へと振るうが時すでに遅し。紫は徳利と猪口と共にまるでそこに誰もいなかったかのように消え去っていた。

「……逃げられたわね。次あつたら許さな……ん？封筒かしら？」

いつの間にかお祓い棒の先端に封筒がつけられてることに気づき、それを手に取りすぐに中身を見る。

「しばらくは貯金を切り崩さなくて大丈夫そうね」

そんな言葉が夜の神社に溶けていき、霊夢は神社へと帰っていく。宴会の後片付けは……当然終わってなどいなかった。

「かなりしでかしたわね……鬼人正邪の情報は他の幻想郷貰ってたのに特に対策も講じないまま異変を起こらせたわ。その鬼人正邪もまだ捕まってるようだし、これは厄介ね」

星空が輝く夜の中、神社も人里も紅い館も竹林もない場所で第七紫は一人今回の異変の反省をしていた。情報を聞いていたとはいえ、その人物の性格や能力などしかない所以对策のしようもないと思うが、分かっているながら起こってしまった今、そう樂觀するわけにもいかない。

「賞金首にはしたものの、それで捕まるかどうかは分からないし、今も更なる計画を企ててると思うると早めに捕らえる必要があるのよね……でも、どうしたものかしら」

初めての悪意ある敵。これまで幻想郷を利用しようと、我が物にしようとする人物は少なくはない……それどころか今でもいるくらいだ。だが、その幻想郷をぶち壊し新たに作り替えようとする敵は第七紫にとって初めて相手する敵だった。

幻想郷は力だけで支配できるような世界ではない。幻想郷は頭脳だけで支配できる世界ではない。幻想郷の実質の支配者と呼ばれる八雲紫でさえ、完全に幻想郷を操れるわけではないのだ。

幻想郷を我が物にする方法は単純だ。幻想郷の偉い立ち位置になれさえすればいい。だが、しかしそのためには自らの行動に枷がかかる。その立ち位置にいるためにはその立ち位置にそぐう振る舞いが求められる。

枷がかかった者など、八雲紫にとって油断さえしなければ負けることのない敵でしかない。だからこそ、第七紫は実質の支配者と呼ばれるのだ。

だが、しばらくそんな敵しか相手にしてこなかった第七紫にとって、鬼人正邪というテロリストのような敵は厄介であり、目障りすぎる敵だ。

正邪が幻想郷を支配できるとは誰も思っていないだろう。幻想郷には一人だけではなんとかできないほどの実力者が何人もいる。それに正邪が勝つなど無理な話だと。人里の人間でも分かる簡単なことだ。

だが、一人じゃなければ？正邪が仲間をつけてしまえば？実際、今回の異変も正邪は一寸法師を騙して仲間にして起こしたものだ。そしてその異変の影響は第七紫のスキマまで来ている。

今回は仲間が一人だけだったから早期解決に至れたかもしれない。だが、さらに人数が増えれば？軍団ができてしまえば？霊夢や第七紫の力だけでは解決できなくなるかもしれない。そんなとき得をするのは誰か……そう、幻想郷を我が物にしようとする企む者たちだ。

あの八雲紫に恩を売り、テロの鎮圧に手伝ったという功績を手に入れることができる。そうなれば更なる権力を手にいれ、幻想郷を我が物にする計画が進んでしまう。結局のところ、恐ろしいのは正邪では



ない。その正邪から来るかもしれない余波なのだ。

正邪を賞金首にしてる今でさえも、異変を起こした元凶を捕らえるという功績をその者たちに取りられる可能性がある。それだけ、今回の件は第七紫にとって重要なことなのだ。

巫女が取り逃がした異変の元凶……それを捕らえたという功績さえ大きすぎる。しかも、正邪が逃げ続けるほど、多くの人物が捕らえるのに失敗するほど、捕らえたときの功績は更に大きくなる。早期発見、早期捕獲。それこそが第七紫に残された唯一とも言ってもいい安全な道だった。

「とりあえず、暫くは藍に捜索を任せましょう。はあ……これから先、忙しくなりそうね」

第七紫はそう言い残し、スキマへと戻っていく。とても悲しいことに、彼女の苦悩はまだまだ始まったばかりなのでであった。